

# 崖つぶちのピイプル

作／青木由里

舞台は「三途の崖」という観光名所。海に面していて直角に近い絶壁の崖は、自殺の名所でもある。この崖で五十年前に起きた戦争当時、心中の約束をした男（鶴造）と女（亀子）がいた。しかし、空襲により離れ離れになり、行方不明になった男を待ちながら、この崖に女は棲みついた。男は五十年の時を経て、この崖にやって来る。この二人が、三途の崖にやって来る人々とコメデイタツチで絡みながら、話が展開していく短編五本立て作品である。舞台つら中央に張り出しがある。下手奥は一段高くなっている。舞台中央にベンチが一つ置かれていて、その脇に古ぼけた灯籠が一つある。

## 《第一話〜第五話 登場人物》

鶴造（つるぞう） 亀子の元恋人。出征前夜、空襲で負傷。その後、五十年間昏睡状態が続き、目を覚ました白髪の老人（六十八歳）。

亀子（かめこ） 鶴造の元恋人。五十年前、三途の崖で心中の約束をした鶴造が空襲で行方不明になり、必死で探し回ったが発見することができなかった。鶴造の死を受け入れられず、いつか鶴造と会える日が来る日だけを夢見て、一人で鶴造の子を産み育てたが、そ

の娘もキャリアウーマンとして海外に旅立ち、孤独な人生の意味付けをするために、  
約束の場所「三途の崖」に棲みついて、鶴造を待ち続ける。

## 《第一話 登場人物》

羊朗（ひつじろう） 観光バスの運転手。鳥菜と一ヶ月前に結婚したばかりの新婚さん。亜猪は同じ

バス会社の先輩で元不倫関係だった。

鳥菜（とりな） 羊朗の新妻。

亜猪（あい） 観光バスのバスガイド。既婚者。羊朗とは元不倫関係。

## 《第二話 登場人物》

猿太（えんた） 柰子と夫婦。三十歳。某保険会社の営業係長。

柰子（ねね） 猿太の妻。元キックボクシングの選手だが夫には秘密。

犬一（けんいち） 自殺の名所「三途の崖」を定期的に見回っている駐在所の警官。

## 《第三話 登場人物》

巳来（みき） ホステス。実は元男性。一年前ようやく念願の性転換手術を受け、晴れて女性の体を獲得し、女性としての魅力を最大限発揮できるホステスという職業に就いた。

寅美（とらみ） ホステス。現在、店でNo.1。実は元男性。借金返済のために騙されて女性にされてしまった悲しい過去がある。



鶴造

うひゃーっ！

鶴造、驚いて彼なりのフルスピードで下手に去る。

羊朗

ちよ、ちよっと！（鶴造の去った方向を見て）なんだ？あの爺さん…まさか、ここから飛び降りようとしてたとか？最近増えてるもんな、年寄りの自殺…

上手から亜猪がやって来る。

亜猪

羊朗、どうしたの、ボーっとして。

羊朗

あ、亜猪！いい、今さ、爺さんがこっから飛び込もうとしてたんだ。

亜猪

え？ウソ！

羊朗

ホントホント、オレが声かけたんでやめたようだけど…

亜猪

へえーっ！そう…いいことしたじゃない。

羊朗

ま、まあね…

— 間 —

亜猪

飛び降りたくなっちゃった。

羊朗

え？

飛び降りようかな…

亜猪（止めようとして引き寄せる）

うっそーっ！（抱きつく）

お、おいつーやめろよっ！（亜猪を突き飛ばす）

イタツ！

ごめん…けど、こんなとこでいきなり抱きつくなんて…

かわいい奥さんね。

え……

まさか羊朗の奥さんがうちのバスに乗り込んでくるなんて予想外だったわ…

オ…オレだってびっくりだよ。

知らなかったの？

知るわけないだろ！

ふーん。

つたく、何考えてんだ鳥菜の奴…

へえ…鳥菜って言うのね、奥さん。

…

鳥菜か…鳥菜ちゃん？…リナちゃん？鳥ちゃん？ぴーちゃん？びびちゃん？びよちゃん？びよび

よびよびよ…

何が言いたいんだよ！

羊朗

亜猪

亜猪 何て呼んでるのかなあって。

羊朗 関係ないだろ、君には。

亜猪 ……あなたが好き……忘れられないの……忘れようとしてるのよ、でも会社で顔を合わすたびに楽しかった一ヶ月前までのことが頭をよぎるの。

羊朗 やめてくれ！…

亜猪 ごめん……未練がましいわね。

羊朗 君は君の旦那さんを大事にしるよ…

亜猪 わかってる……でもね、羊朗…

鳥菜が走ってくる。

鳥菜 いた！

羊朗 イ、インコ！

亜猪 インコ？

鳥菜 ジロちゃん、みつけ！（羊朗に抱きつく）

亜猪 あ！…

羊朗 お、おいっ！

鳥菜 （亜猪を見て）いいじゃない、まだ熱々の新婚さんよ、私たち。ねえ、バスガイドさん。

亜猪 え、ええ…

鳥菜 いっぱい見てるでしょ、こういう新婚さん。

（開き直って）ええ、そりやもう！気にしなくていいのよ、羊朗。

鳥菜 羊朗？（二人を見て）随分親しいのね。

羊朗 この人は、先輩のバスガイド、井上亜猪さん。優秀なんだよ、井上さんって。なんで、入社以来、観光バスの運転手心得を色々…

亜猪 羊朗さん、引っ込み思案なところがあるでしょ？私たちはサービス業なの、だから色々…  
鳥菜 いろいろって？

亜猪 そうねえ…あんなこととか、こんなこととか…

鳥菜 なあに？あんなこととかこんなことって。

羊朗 家に帰ったら教えてやるよ。

鳥菜 ほんとお？

羊朗 ああほんとだ。

鳥菜 わかった。

羊朗 ところでインコ。なぜ、今日、うちのバスに？

鳥菜 前からね、一度見てみたかったの、ジロちゃんの運転手姿。

羊朗 だったらそう言ってくれば…

鳥菜 驚かせたかったの！

羊朗 だからってこんな…

鳥菜 驚いたでしょ？

羊朗 う、うん…

鳥菜 何かまずいことでも？

羊朗 いや、あの、ほら、どうせ乗るなら、もっと景色の良いツアーを選んであげられたのに、って。

鳥菜 ほんと？

羊朗 ほ・ん・と！

亜猪 あら、ここの景色、どこにも引けを取らないと思うけど。

鳥菜 え？

羊朗 (小声で) 亜猪！

亜猪 お客様、どうぞご覧下さい、この素晴らしい眺めを。

羊朗 こ、ここは、高所恐怖症には…

鳥菜 (岩壁に近づき) うわっ！…こわいっ！(しゃがみこみ) ジロちゃん！

羊朗 (鳥菜に近づき) だから言ったこっちゃんない！

亜猪 この崖は「三途の崖」と申しまして、海食によって海岸の岩肌が削られた、高さ約三十メートル

の岩壁です。この岩は輝石安山岩の柱状節理でこれほどの規模を持つものは世界でも稀で、国の天然記念物の指定を受けているんですよ。

へえ…(再び真下を覗きこみ) うわっ！落ちたら死ぬ？

たぶん死にます。

たぶん？

死にます、きつと死にます。

ジロちゃんジロちゃんジロちゃん！

危ない！暴れるな！

お客様！お気をつけください！

亜猪

羊朗

鳥菜

亜猪

鳥菜

亜猪

鳥菜

亜猪

羊朗

鳥菜

羊朗

亜猪

羊朗

鳥菜

亜猪

羊朗

鳥菜

鳥菜 ああく面白かった！

羊朗・亜猪 え？

鳥菜 アタシ、高いとこ大好きなの、うふ。

羊朗 えーっ？…知らなかった…

鳥菜 やっぱり今日のバスにして良かったあ。井上さん、続けてくださいます？

亜猪 …この三途の崖は、自殺の名所としても有名でして…

鳥菜 でしょうね、この高さだもん、イチコロだわ。

亜猪 あの世とこの世の境目に流れるのは三途の川。その三途から「三途の崖」という名称がつけられたそうです。

鳥菜 わっかりやすい！さすがね、ペラペラつと言えちゃうんですね。

亜猪 それが仕事ですから。

鳥菜 きれいだし、もてるんだらうな。でしょ、ジロちゃん。

羊朗 あ、ああ。人気者だよ、亜猪…

鳥菜 あい？

羊朗 井上さんは。

亜猪 やめてよ、おだてたって何にも出ないわよ。

鳥菜 私、のど渴いちゃった。ちよつとジュース買って来る。

羊朗 お、おい、インコ。

鳥菜 わかってる、井上さんの分も、でしょ？

亜猪 わ、私の分も？

羊朗　　そ、そうじゃなくて…

鳥菜　　いつもジロちゃんがお世話になってる先輩だもん、ジュースぐらいご馳走させてください。

羊朗　　おい、鳥菜！

鳥菜　　行ってきまーす！

鳥菜、上手に走り去る。

亜猪　　あ…行っちゃった。

羊朗　　ったく、いつもあの調子。思い込んだら人のことはおかまいなし。ああーっ！（頭を抱え込む）

亜猪　　あら…あらららあ？

羊朗　　な、なんだよ。

亜猪　　うまくいつてるの？あなたたち。

羊朗　　い、いつてるよ、まだ新婚一ヶ月だぜ。

亜猪　　そうかなあ？怪しいなあ。

羊朗　　…本音を言うとね、ちよつと疲れてる。

亜猪　　へえ…

羊朗　　かわいいんだ、かわいいんだよ、あいつ…けどね…

亜猪　　けど？

羊朗　　なんていうか…その…ホツとくつろげないというか…

亜猪　　私といるときみたいにか…

羊朗

…

亜猪

凶星？

羊朗

いや、あの…

亜猪

凶星！凶星凶星凶星凶星！

羊朗

う、うん…

鳥菜、上手から出てくる。

鳥菜

凶星ですって！

羊朗

イ、インコ！

亜猪

ジュースを買いに行ったんじゃ…

鳥菜

何がいいか聞き忘れちゃったから…ジロちゃん！どういうこと？この人とどういう関係なの！

羊朗

ど、同僚だよ。

鳥菜

しらばっくれる気？

羊朗

ほんとだって！信じられないのか、オレを！

鳥菜

信じられっこないでしょ！「私といるときみしたいに？」って言ったのよ、この人。疑われても仕方ない、違う？

亜猪

私、好きなの、羊朗が。

羊朗

あ、あいっ！

亜猪と鳥菜、睨み合う。

鳥菜　それって、宣戦布告？

亜猪　違うわよ。好きって言っただけ。

鳥菜　ちよつとお！ジロちゃん！ちゃんと説明して！

羊朗　やめてくれ、やめてくれよ、二人とも…

亜猪　私が説明してあげるわ。

羊朗　やめろ！

亜猪　私と羊朗はね、あなたたちが結婚する直前まで…

羊朗　亜猪っ！

鳥菜　直前まで？直前まで何だったって言うの！ジロちゃん、答えて！

羊朗　…

亜猪　不倫関係だった。

鳥菜　ふ、ふりん？

亜猪　そう。私、結婚してるの。だから、不倫。

羊朗　ああ…言っちゃった…

鳥菜　そんな…直前って…じゃ、私と付き合ってる間も？

亜猪　まあね。でも別れたのよ、結婚を機に。

鳥菜　…二股かけてたんだ…ジロちゃんがそんな器用な人だったなんて…

羊朗　違う！器用じゃないよ、オレは。

亜猪 器用じゃないわよ、羊朗は。そこがいとこなんだけどね。

鳥菜 何よ、あんた！ジロちゃんのこと、どれくらい知ってるって言うの！知ったかぶりはやめてよ！

亜猪 あら、じゃ、あなたはどれくらい知ってるの？たった半年でしょ、付き合ったのは。

鳥菜 な、な、な…

亜猪 私はね、あなたのことも、それ以外のことも、いろんなこと聞いているのよ。

羊朗 相談だよ、姉さんに相談するように…

亜猪 姉さん？そうね、時には姉さん、時にはママ、そして時には恋人…

羊朗 (絶望的になり) ああ…

鳥菜 やっぱり恋人だったんじゃない！ジロちゃん！正直に答えて！

羊朗 …ごめん…

鳥菜 …認めるの？

亜猪 認めざるを得ないわよ、そこまで追究されたら。

鳥菜 認めないでよ…

羊朗・亜猪 え？

鳥菜 認めないでよ！騙すなら最後まで騙してよ！

羊朗 …ごめん…

鳥菜 謝らないでよ…(泣き出す)

羊朗 (鳥菜のそばに行き) ごめん…黙っててごめん…けど、本当に別れたんだよ、この人とは…信じ  
てくれ。

亜猪 別れたわよ、一度は。

羊朗 どういうことだよ、亜猪！

亜猪 撤回する。やっぱり別れない。

羊朗 おい！

亜猪 私にとって羊朗は、旦那よりも大切な人だってわかったの。きっぱりと離婚するわ。

羊朗 な、何言ってるんだよ、今更！

亜猪 あなただだって私という方がいいんでしょ？さっきそう言ったじゃない。

羊朗 あれは！

鳥菜 いや…いやよ！ジロちゃんは私のダーリンなんだから！そうでしょ、ジロちゃん！

羊朗 う、うん…

亜猪 羊朗！私とその我儘娘とどっちが好きなの？正直に答えて。

羊朗 正直にって言われると…

鳥菜 はっきりインコが好きだって言って！

羊朗 正直にだろ？正直にって言われると、どう答えたらいいいのか…

鳥菜 なんではっきり言ってくれないの？ジロちゃんはこの人を捨てて私と結婚したんじゃない！私が

好きだからでしょ？

好きだよ…けど…

亜猪 やっぱり私のことが忘れられない…顔にそうかいてあるわ。

羊朗 へ？（顔をさわりまくり）か、かいてあるわけないだろ！

亜猪 うふふ…凶星ね。

鳥菜 凶星…なの？

羊朗　い、いや…

亜猪　凶星！凶星凶星凶星凶星凶星！

羊朗　う、うん…

鳥菜　何ですって！

羊朗　いや、そういうことじゃなくて…

鳥菜　じゃ、どういうことなの？

羊朗　いや…あの…その…

亜猪・鳥菜　はつきりしてよ！

羊朗　二人とも好き！

く　間　く

亜猪　こんな小娘と私が同列？

鳥菜　こんなおばちゃんとびちびちの私が同列？

羊朗　（早口でまくし立てる）お、オレは、二人とも好きなんだ、亜猪はお母さんみたいに懐が深くてあつたかくて優しくくて、ときにはオレを子どものように叱ってくれる、インコはかわいくて一途でオレが守ってやりたいって初めて思った女で…

亜猪・鳥菜　で？

羊朗　で？って？

亜猪・鳥菜　どっちを選ぶのよ！

羊朗 ど、どっちって…だから言ってるだろ、二人とも好きなんだよ、選べないよ…

鳥菜 じゃ、私と離婚するのね。

羊朗 離婚？離婚なんてするわけ…

亜猪 じゃ、私と寄りを戻したくないってわけね。

羊朗 いや、それは…

亜猪・鳥菜 どっちなの！

羊朗 ……

鳥菜 ひどいっ！ひどすぎるよ！まだ新婚一ヶ月よ！好きだったのに、本当に愛してたのに…

羊朗 お、オレだって…（亜猪を見て口をつぐむ）

鳥菜 私は、私だけを愛してくれる人と二人で力を合わせて、真っ赤な屋根の真っ白い壁のマイホームを建てて、愛する人の赤ちゃんを身ごもって、産んで育てて、お休みの日には、家族で動物園や遊園地に行つて食事して…私だけを愛してくれる人と…それなのに、あなたは…

羊朗 そりゃ無理だよ…どこにいるんだよ、一人の人だけを愛し続けてる男が。

鳥菜 開き直った…

羊朗 そうじゃない！現実的なことを言ってるんだ。オレは君が正直に答えてって言うから、正直に答えたんだよ、どっちが好きかって言う問いに。そして、離婚はしないと答えている。

亜猪 私が離婚しても？

羊朗 うーん…それを言われると…

鳥菜 なんて迷うの？迷うとこじゃないでしょ！

亜猪 どうなの？

羊朗 うーん：

鳥菜 いやあーっ！もういいっ！私、別れる！絶対に別れる！

羊朗 インコ！別れるなんて言わないで：

鳥菜 もっと頼りになる人だって思ってた、なのに、なのに：（泣きながら上手に走り去る）

羊朗 インコ！（追いかけてよとする）

巫猪 （羊朗を掴み）行っちゃったわ。諦めなさいって。

羊朗 諦める？かわいいインコを諦める？冗談だろ？

巫猪 じゃ、私がいなくなってもいいのね？

羊朗 君とは、会社で会えるもん：

巫猪 そういうことじゃないでしょ！ちゃんと考えなさい！

羊朗 うーん：巫猪も必要、インコも必要：

巫猪 あっそう！もういいわ！この私がここまで言ってるのに、ああそうっ！優柔不断もそこまでいけばお見事よ。私を失って後悔してもしらないから。バイバイ、羊朗！

亀子がスタスタとやって来る。

亀子 ほら、兄ちゃん、これ、下のバス停にあるゴミ箱に持ってって！

羊朗 どうしよう、どうしよう…

亀子 どうしようじゃなくて、ゴミ箱に捨てればそれでいいんだよ。

羊朗 だってそんなこと言ったって、どっちも好きなんだもん（無視して行こうとする）

亀子  
兄ちゃん！

羊朗  
へ？

亀子  
ここはね、ゴミ捨て場じゃないんだ！ ったく最近のツアー客はマナーが悪くてたまったもんじゃ

ない！ ほら、これ、あんたんとこの客がポイって投げ捨てた缶だよ！

羊朗  
は、はいっ！ す、すみません！

亀子  
しっかりしな、兄ちゃん！ 女を甘くみちやいかん！

羊朗  
へ？

亀子、上手にスタスタと去る。

羊朗  
ダレ？ あの婆さん…も、もしかして、今のやり取りを？…ギヤーツ恥ずかしーっ！

しゃがみこみ、ボーっと海を見つめる羊朗。そこへ亜猪が戻って来る。

亜猪  
ったく、もう…

羊朗  
…亜猪…オレ、死にたくなった…

亜猪  
バカっ！…もう、ホントほっとけないんだから…

羊朗  
あいっ！

亜猪  
さ、出発の時間よ、運転手さん。

羊朗  
う、うん…

亜猪 しっかりしてよ、運転手さん！あなたは大勢の命を預かっているのよ。  
う、うん。

亜猪 ふう…（小声で）別れられないわね、これじゃ…

羊朗 え？

亜猪 なんでもない！さ、行きましよう。（缶の袋を見て）何、コレ。

羊朗 あ、コレ？これは…

亜猪 ふーん…そっかあ。

羊朗 な、何？

亜猪 心を入れ替える気になったんだ。だからゴミ拾いを…羊朗らしいわね。

羊朗 え？いや、その…

亜猪 いいわよ、隠さなくなつて。

羊朗 いや、ち、ちが…

亜猪 そういうとこ、好きよ。

羊朗 へ？

亜猪 （バシッと羊朗の背中を叩き）もうっ！何度も言わせないで！

羊朗 あ、う、うん…亜猪…オレ…

亜猪 ホラ！行きましよう！

羊朗 う、うん。

上手に亜猪と羊朗が去る。

## 第二話 崖っぶちの殺意

下手奥から思いつめた表情の猿太がやって来て、海を眺める。

猿太

ふう……はあ……（崖の下を覗き）こ、こわっ！……けど……（もう一度、崖下を恐る恐る眺め）  
……ふう……

そこへ、上手から犬一がやって来る。

犬一

どうしたんですか？

猿太

ギヤーツ！

犬一

あ、危ないっ！

猿太、もう少しで崖に落ちそうになるのを犬一が支え、事なきを得る。

猿太

な、何するんですか！

犬一

何するって、そりゃこっちの台詞ですよ。

猿太

はあーっ？

犬一

はい。じゃ、お聞きしましよ。

猿太 な、何を？

犬一 ごまかさないでくださいね。

猿太 何を、ですか！

犬一 あなたは自殺をしようとした。

猿太 へ？

犬一 なぜ自殺をしようとしたんですか？

猿太 ち、違う…

犬一 理由を聞かせてください。

猿太 違います！

犬一 いいんですよ、ごまかさなくても。

猿太 違うんです！

犬一 皆さん、そう仰るんですよ、違うんです！つて。

猿太 僕は自殺なんか…

犬一 いやあ、面白い！全くおんなじ反応！アハハハ…ああ愉快愉快！やめられませんか、この仕事。

猿太 アハハハ…

猿太 おまわりさん！

犬一 （一瞬笑いをやめて猿太を見るが再び）アハハハ…

猿太 無視しないでください、おまわりさん！

犬一 （周囲を見て）わたしのことですか？

猿太 え？（周囲を見て）ここには、あなたしかおまわりさんは…

犬一 ケンイチ！

猿太 へ？

犬一 ケンイチと呼んで。

猿太 は？

犬一 名前があるんですよ、私にもれっきとした名前が。

猿太 そ、そりやそうでしょう、ダレだっつれっきとした名前があるのは至極当然。

犬一 はい！では、呼んで！

猿太 はい？

犬一 名前で呼んで！

猿太 べ、別に名前で呼ばなくても…

犬一 ケンイチです！

猿太 け、ケンイチさん？

犬一 はい！あなたは？

猿太 え？

犬一 あなたの名前、なんつーの？

猿太 なんつーのって…

犬一 (手帳にメモをしながら) 名無しの権兵衛、あるいは記憶喪失…

猿太 え、えんた！えんたです！

犬一 えんたさん？

猿太 はい、僕の名前は猿太。

犬一 思い出せたんですね！良かった良かった！

猿太 いえ、そういうことでは…

犬一 えんたさんって変わった名前ですね。どういう字ですか？

猿太 さる、お猿さんの猿に太いという字で猿太…

犬一 太った猿？（猿太をマジマジと見て）太った猿！グハハハハ…

猿太 そうやって、よくいじめられましたよ。

犬一 いや、こりや失敬！私はね、犬に数字の二で犬一。

猿太 犬と一？

犬一 はい、ワンちゃんと数字のワンでワンワン。

猿太 ワンワン？

犬一 （犬真似）うーっワン！ワンワン！

猿太 （思わず吹き出す）ぷっ……

犬一 笑った。

猿太 え？

犬一 笑いましたね？

猿太 いや…

犬一 そうやって、よくいじめられました。

猿太 …すみません…

一瞬の間。

犬一 素敵でしたよ。

猿太 え？

犬一 あなたの笑顔！

猿太 そ、そうですか？

犬一 そうですとも！だから自殺なんて考えちゃいけません。

猿太 ぼ、ぼくは自殺なんて…

犬一 ごまかすんですか？親友の私に。

猿太 し、親友？

犬一 はい。

猿太 あ、あの…おまわりさん？

犬一 犬一。

猿太 は、はい、犬一さん、あなたと僕は今、ここで知り合ったばかりで親友と呼ぶには…

犬一 いいじゃないですか、そんなこと。

猿太 よくないですよ！

犬一 じゃ、聞きますが、長く付き合えば親友になれるんですか？

猿太 え？いや、そうとは限りませんが…

犬一 ですよねー

猿太 ですが…

犬一 じゃ、決まり！あなたと私は親友。

猿太 …は、はい…

犬一 で？

猿太 で、って？

犬一 自殺の理由はなに？

猿太 だから、僕は自殺なんか…

犬一 猿太さんはさっき、ここから飛び降りようとした。

猿太 していない。

犬一 した。

猿太 してません！

犬一 しましたしたーっ！

猿太 してませんって！

犬一 親友にごまかしは通用しない！

猿太 本当に飛び降りようとしたわけじゃないんです、ただ…

犬一 ただ？

柊子がやって来る。

柊子 あなた！こんなところに居たの。

猿太 柊子！…見つかった…

柊子 え？

犬一　これはこれは、猿太さんの奥様で？

祢子　え？ええ。あなたは？

犬一　猿太さんの親友。

祢子　え？えーっ？

犬一　ケンイチです！

祢子　は、初めまして。猿太の妻、祢子です。

犬一　祢子さん、お目にかかれて光栄です。

祢子　あなた！話してくれなかったじゃない！おまわりさんの親友がいるなんて！

猿太　僕だつてびっくりしてんだよ。

祢子　え？どういうこと。

犬一　まあ、いいじゃありませんか。そうですか、ご夫婦でご旅行ですか、自殺の名所に、そうですか

あ。

祢子　いやだわ、自殺の名所だなんて。私たちは観光に来たんです、ね、あなた。

猿太　そうだよ。(犬一) わかつてくれたかな？僕がここに来た目的は観光、自殺じゃないってこと。

犬一　(囁き声で) すみませーん。あなたがあんまり深刻そうだったんで、つい。

猿太　わかってもらえればいいんだよ。

犬一　猿太さん、奥さん、それじゃ、ごゆっくり絶景を楽しんで下さい。お邪魔虫の私は退散しますね。

それでは！

犬一、下手奥に去りかける。祢子、そっと崖下を覗く。

犬一 足元！

柊子 ギャーッ！

犬一 に、お気をつけて。(ニコツと笑う)

柊子 (ニコツと笑い) あ、ありがとう。

犬一 では。

犬一、下手奥に走り去る。

猿太 大丈夫か？

柊子 ああ、びつくりした。もうちよつとで踏み外すところだったわ。

猿太 危ない危ない、気をつけなくちゃ。

柊子 あの人がいけないのよ、急に大声を出すから。何なの、あの人、本当に親友？

猿太 そうらしい。

柊子 らしいって…

猿太 (風景を見て) おお、絶景かな、絶景かな。

柊子 (風景を見て) ホント！水平線が…きれい。

猿太 君も…きれいだよ。

柊子 あなた…

猿太 愛してる。

柊子 私もよ。

猿太 本当だよ、本当に愛してる。

柊子 わかってるわ…もうっ！どうしたの？今日のあなた変よ。

猿太 ……結婚して一年か…

柊子 早いわね、あつと言う間の一年だった。

猿太 我慢我慢の一年だった…

柊子 我慢？

猿太 え、いや、その…

柊子 我慢我慢の一年って…あなた、私に我慢してたの？！

猿太 いや、そうじゃなくて…

柊子 はっきり言って！私のどこが…

猿太 違うんだよ。

柊子 ごまかさないで！

猿太 ……

柊子 まだ一年よ、これから長い年月（としつき）同じ道を歩んでいくのよ！

猿太 うん…

柊子 今から隠し事なんかしてたら、いつか破綻する！

猿太 すまん…

柊子 話してちょうだい、何を我慢してたの？

猿太 実はさ…仕事で色々あつて、ストレスが…

祢子 仕事のストレス？

猿太 そう…

祢子 本当？

猿太 本当だよ。君への我慢じゃない、我慢なんかじゃない…我慢なんかじゃ…

祢子 良かった！

猿太 良かった？

祢子 え？いえ、違うの！私に対しての不満だったらどうしようって…

猿太 違うよ。僕のストレスは…

祢子 ごめんなさい！…そんなに大変なの？今の仕事。

猿太 ああ…係長になってから営業成績がちっとも伸びないんだ。上からは叩かれ、下からはつつかれ

：

祢子 中間管理職って辛いね…けど、大丈夫よ、あなたなら。

猿太 大丈夫？

祢子 ええ、あなたならきつと大丈夫。

猿太 何が大丈夫なんだ！

祢子 え…

猿太 知りもしないくせに、簡単に言うな！

祢子 …今日のあなた、変よ。やたら怒りっぽい。

猿太 …こういうときだつてあるさ。

祢子 今まで我慢してたの？

猿太 …嫌いになったか？

柊子 ううん…ね、飲もうか。たまにはいいんじゃない？こういう景色の良いところで昼間っから一杯やるのも。

猿太 ……

柊子 じゃ、ちょっと（グビッと飲む真似をして）買って来るわね。

猿太 ……

柊子 （行きかけて）変なこと考えちゃダメよ！あなたは私にとってダレよりも大切な人なんだから。

柊子、上手に走り去る。入れ替わりに犬一がやって来て、猿太の背後にそーっと近寄る。

猿太 …僕にとっても、君はダレよりも大切な人…そう、大切な人なんだ…だから…

犬一 猿太さん。

猿太 うわっ！おまわりさん！

犬一 ケンイチ、です！

猿太 け、犬一さん、今度は何です？

犬一 どうも気になりましたねえ。

猿太 何が？

犬一 奥さんが来る前に猿太さんが言った一言「本当に飛び降りようとしたわけじゃないんです、ただ

…」

猿太 それのどこが…気になるって？

犬一 「ただ」ってのが、気になって気になって。

猿太 気にするほどのことじゃないよ。

犬一 ダメだ！このままだと眠れない！

猿太 しつこいですね、あなたも。

犬一 ケンイチ、です！

猿太 犬一！しつこいっ！

犬一 うふふ…呼び捨てにしてくれたね。これで本物の親友だ。

猿太 もう、何だっていいよ。

犬一 で？

猿太 もーっ！

犬一 もーっ！

猿太 ウツキヤツキヤツキヤツ！

犬一 ウーワンワンワンワン！

く 間 く

猿太 (いきなり土下座して) ムシヨにぶち込んで下さい！

犬一 はい…え？エーッ？

猿太 この猿太をオリの中に閉じ込めてやって下さい！

犬一 ど、どうしちやっただんですか？

猿太　　お願いです！あなたは僕を親友だっけ言いましたよね？親友なら僕の頼みを聞いて下さい！この通りです！

犬一　　あの、いくら親友の頼みとは言え、罪を犯してもいない人を牢屋にぶち込むなんてことは…え？ちよ、ちよと待って下さい！もしかして…猿太さんは何かとんでもないことをやらかしたんですか？

猿太　　やらかしてません。

犬一　　はーっ！びっくりした！警官初の大捕物かと、一瞬びびっちゃいましたよ。

猿太　　やらかしてはいない、まだ…

犬一　　ま、まだ？

猿太　　けど、やらかしそうなんだ！

犬一　　はい？！

猿太　　大変なことをやらかしちゃいそうなんだ！だから、オリに入れて欲しいって頼んでるんだよお！あの、よく聞いて下さい。何もやっていない人を牢屋にぶち込むことは出来ないんですよ、それくらい、あなたもわかるでしょ？

猿太　　あなたは警察官！親友をオリに入れる義務がある！

犬一　　はあ？

猿太　　このままでと…

犬一　　このままでと？

猿太　　このままでと私は、妻を…

犬一　　妻を？

猿太  
殺すかもしれない！

柊子が戻って来て猿太の言葉を聞いてしまい、驚愕して缶ビールを地面に落とす。

柊子  
あ：あなた：

犬一  
奥さん！

柊子  
私を殺すって：

猿太  
うわーっ！

猿太が崖から飛び込もうとするのを必死に止める犬一。柊子は一瞬足がすくんだものの、気を取り直し、犬一と一緒に猿太を崖っぷちから連れ戻す。

犬一  
猿太さん！早まるな！落ち着け！落ち着いて！

猿太  
ダメだーっ！もう私はおしまいだーっ！

犬一  
仕方ないですね：（猿太の頬をバシッと一発殴る）

柊子  
キヤーッ！

猿太  
うぎゃっ！

犬一  
：（猿太に）どう？

柊子  
あなた！私の大切な人になってことするの！

犬一  
目を覚ますには一番効果的なんですよ。でしょ？猿太さん。

猿太 …効いた…

柊子 …そうなんだ…

犬一・柊子 で？

猿太 で、って？

柊子 私を殺すってどういうこと？

猿太 ウキーン！

柊子 う、うきーン？

犬一 (柊子に) しーっ！ (今は静かに、というアクション)

柊子 … (何かを言いかけてやめる) …

一際大きな波の音。

猿太 聞いてくれるか？

柊子 …… (缶ビールを掲げ) コレ、飲んでもいい？

猿太 うん…

犬一 じゃ、私も一本。

柊子 職務中、ですよね？

犬一 今は、親友としてここに居たいんです。

柊子 … (缶ビールを差出し) はい。

犬一 ありがとう。

衾子と犬一が缶ビールをあけ、軽く乾杯をした瞬間、猿太が衾子の缶ビールを取り上げ、ぐいっと飲む。あつけに取られる衾子と犬一。猿太は缶ビールを衾子に返し、すくっと立ち上がり話し始める。

猿太 僕ね、小さい頃、いじめられっこだったんだよ。

衾子 え？

犬一 しーっ！

衾子 あ、はい…

猿太 名前が名前だろ？デブ猿とかブヨブヨモンキーとか…いじめられても我慢して我慢して…学校休むとさ、親が心配するだろ？いじめられてるなんて言ったら悲しむだろ？だからさ、必死で我慢した。僕、運動はイマイチだったから、みんなに負けてたまるかって一生懸命勉強したんだ。知らなかった…あなたがいじめられっこだったなんて…

犬一 ダレでもありますよ、秘密の一つや二つ。

衾子 ……それで？

猿太 うち、インコを飼ってたんだ。

衾子 インコ？

猿太 小さくて愛らしくてとつてもかわいいインコでね、何よりも大切にしてたんだ。

衾子 あなたらしい。

猿太 僕らしい？

柊子 あなたは優しい人よ、だからきつと・・・

猿太 優しい？僕が優しいだつて？

柊子 ええ、とつても優しくして思いやりがあつて・・・

猿太 (呼吸が荒くなつていく) 僕は・・・優しくなんかない・・・僕は・・・僕は・・・

柊子 あなた・・・

犬一 (殴る真似して) もう一発いきますか？

猿太 僕は！殺した！

柊子・犬一 え？

猿太 殺したんだ、殺してしまったんだよ、大切な、大切な、愛しのラブちゃん！

柊子・犬一 ラブちゃん？

猿太 インコの名前！

柊子・犬一 あ、ああ・・・

柊子 けど、なぜ？なぜその大切なラブちゃんと・・・

猿太 どうしようもなく苦しくて、苦しくて・・・行き場のない苦しみに襲われて・・・ラブちゃんを思わず・・・

ウオーツ！

犬一 発作的に・・・何かをしたんですね。

柊子 何かつて・・・

犬一 (柊子に) シーツ！

猿太 その時、不思議なことが起きたんだ。

犬一 不思議なこと？

猿太 消えたんだよ、それまでの苦しさが一気にサーッと消えた…

犬一 すつきり？

猿太 そう、すつきり！

犬一 なるほど。

猿太 で、次の日から、どんなにいじめられてもへっちゃらでさ。

犬一 そりゃ凄い！

猿太 だんだんいじめの回数も減っていった…不思議だろ？

犬一 不思議だ。

猿太 それからは順調に中学高校生活を過ごして都会の大学に進学したんだけど、それが悪かった。人

混みと都会の人間になじめず、友人も出来なくてストレスが溜まる一方だった。それでも僕は頑張った、一生懸命勉強して、何とか一流企業に入ろうと…

犬一 ちよつと待った！もしかして…その頃、何か飼っていたとか？

…

猿太 飼ってたの？

猿太 猫を一匹…

犬一 やっぱり…

柊子 やっぱりって…

猿太 さすが親友。勘がいいね…そう…僕はまた…やってしまった。僕の、大切な、大切な、愛しい、  
ブブを！

柊子・犬一 ぶぶ？

犬一 あっ！猫の名前！

猿太 そう！毛がふさふさでぶっくりしていて、「ぶぶ」って名前がぴったりの相棒だった。

犬一 都会で唯一の友だち！

猿太 さすが親友。勘がいい！…けど僕は、その都会で唯一の友だちをまた…

犬一 発作的に何かをしたんですね。

猿太 (頷いて) 部屋に残ったのはにゃん友一つ。

柊子・犬一 え？

猿太 ぶぶちゃんのにゃん友！

犬一 あ：ああ、猫の便所。

猿太 トイレット！ぶぶちゃんの大切なトイレットだよお！

犬一 すみません。

猿太 僕はまたしても大切な相棒を…うう…

犬一 殺したんですね。

柊子 殺した？！

猿太 さすが親友、勘がいい。

柊子 いやーっ！

犬一 柊子さん、落ち着いて落ち着いて！

猿太 僕はこの手で愛しいラブちゃんとブブを殺したんだよーっ！

柊子 あなたがそんなことをするなんて…

犬一 (柊子を制し) 大切に思えば思うほど、別れたくないのに別れたくなるってことだね、親友。

猿太 そう！一緒にいたい！ずっと一緒にいたいんだ！なのに…なのに…ぶぶーっ！ぶぶーっ！

犬一 と、普通は泣くところだけど、あなたは泣かなかった。

猿太 鋭い！

柰子 え…

犬一 親友ですから。

猿太 おお親友！そう、そうなんだ。僕はその時、ラブちゃんと決別したときのあの感覚が蘇って…

犬一 すつきり？

猿太 そう、すつきり。

猿太と犬一、柰子を見る。

柰子 ……なぜ…話してくれなかったの…

猿太 言えるか？こんなこと。

犬一 言えませんよ、普通。

猿太 ありがとうございます！親友よ！

犬一 どういたしまして。

柰子 うう…（泣く）

猿太 それからというものの、ストレスを感じるたびに、かわいいと思う動物を殺めたい衝動にかられ…

柰子 まさか、次々と…

猿太 やってないっ！やってないよ！ブブの後は、一度たりともやってない！

衤子 本当に？

猿太 ああ、本当だ！

犬一 けど、ストレスが溜まるにつれ、衝動が強くなって来たんだね？

衤子 いやよ、やめて！お願いだから…

猿太 僕だつてやりたくない！やりたくないんだ！けど…目の前に愛しい動物がいると…

犬一 奥さん、今、動物飼ってます？

衤子 いいえ…

犬一 じゃ、今、あなたの一番大切な動物って…

猿太と犬一、衤子を見る。

衤子 え？えーっ！ま、まさか…わ、私い？

犬一 (猿太に) なんですね？

猿太 だから、だから、頼む！僕をオリに入れてくれ！

犬一 できません！お気持ちはわかりますが…

猿太 なぜだ！このままだと僕は、今一番大切な…大切な愛しい動物を…

衤子 人間よ！

犬一 人間も動物です。

衤子 (缶ビールをぐいっと飲み干し) つまり、この私を殺すかもしれないってことね…

猿太 君を愛してるんだ！心の底から愛してる！だから親友！頼む！

犬一 無理です。

猿太 なぜ！

犬一 罪を犯していないから。

猿太 放置すれば罪を犯すぞ！

犬一 じゃ、ここでやってみて下さい。

猿太・柰子 え？

犬一 私が目撃者。殺人未遂容疑なら逮捕できますよ。ささ、どうぞ。

猿太 (柰子を見つめる)

柰子 あなた……

犬一 どうしました？さあ、どうぞ、やって下さい。あ、ご安心下さい、奥さんが亡くなる前にちゃんと止めますから。ささ！

柰子 私：あなたと別れるくらいなら死んだほうがいい……

猿太 ……い、いやだ、やだやだやだーっ！出来ない！生きている動物を殺すなんて僕には出来ない！

犬一・柰子 え？

犬一 生きている動物？

柰子 じゃ、あなたが殺したのって……

猿太 動かない動物！

柰子 動かない動物？

猿太 ぬいぐるみ。

犬一・柰子 ぬいぐるみ？！

猿太  
ああーっ！もう僕はおしまいだ！祢子、さようなら！

猿太が崖に走ろうとする。その瞬間、祢子が素早い回し蹴りを猿太にくらわす。

犬一  
え？えーっ？

猿太  
な、何？

祢子  
やっちゃった…

猿太  
今の何？

祢子  
とうとうやっちゃった。

猿太  
ど、どういうこと？

犬一  
いやあ、お見事！

祢子  
あーっ！すっきりした！

猿太・犬一  
へ？

祢子  
やりたくってしよがなかつたの、コレ。

猿太・犬一  
はい？

祢子  
私ね、女子キックボクサーだったの。

猿太・犬一  
はい？

祢子  
（キックボクシングの型をやりながら）ハッ！ヤーツ！

猿太・犬一  
ヒエーツ！

祢子  
男子にも負けなかったわ。

猿太・犬一 (驚きで身体が固まる)

祢子 秘密にしてて、ごめん。

犬一 な、なぜ秘密に？

祢子 お見合いがダメになる一番の原因だったから。

犬一 なるほど。

猿太 信じられない…

祢子 私、何回お見合いしたと思う？

猿太・犬一 さ、さあ…

祢子 十回よ、十回。経歴欄に「キックボクサー」って書いたがために全部ご破算…

犬一 そうでしたか。

祢子 私はね、ボクシング込みでまるごと私を受け止めてくれる人と結婚したかったの。けど、親や仲人さんに説得されて、あなたとのお見合いの時は…

猿太 特技は料理って…

犬一 料理、得意なんですか？

祢子 一応。

犬一 素晴らしい！

猿太・祢子 え？

犬一 料理が得意で護身術も身につけてる奥さんなんて最高じゃないですか。ね、猿太さん。

猿太 え…ああ…

祢子 ホントに？私がキックボクサーでも付き合ってくれた？結婚してくれた？

猿太 …正直言うと…わからない…

衾子 やっぱり…

犬一 僕ならOKですけど。

衾子 嘘！

犬一 嘘じゃありません。

衾子 本当？

犬一 はい。けど、出会うのが遅かった…残念。

衾子 残念！

犬一 親友からお二人に一言言わせて下さい。

猿太・衾子 …どうぞ。

犬一 あなた方はこの世で唯一無二のベストカップルです！

猿太・衾子 え？

犬一 今の素早い回し蹴り、実に素晴らしかった！

衾子 あ、ありがとう。

犬一 あんな技を持つてる衾子さんなら、万が一、猿太さんの発作がおきた時、ガッーンと目覚めさせることが出来る！

猿太 え？

衾子 え、じゃ何？キックOKってこと？

猿太 待て。

犬一 はい。じゃんじゃんやっちゃってください。

猿太 待てよ。

柊子 ホントにいいの？

猿太 待ってくれ！

犬一 猿太さん！さつき奥さんに蹴られた後、どうなりましたか？

猿太 覚えてるわけ…

犬一 バシッとやられた瞬間です。思い出してください！

猿太 バシッとやられて・・・(思い出したように) あ！目がパチーっとして…頭も…

猿太・犬一 すつきり！（二人で顔を見合わせて）おおーっ！（抱き合って喜ぶ）

柊子 ちよつと！なんで二人だけで盛り上がってるの？

猿太 ごめんごめん！あまりにも嬉しくてつい…

犬一 あなた方は、隠さなくて良いことを隠して、お互いに苦しんでいたんですね。

猿太 …柊子の苦しみに気づけなかった…

柊子 私もあなたの苦しみに気づけなかった…

猿太 ごめん…

柊子 ごめんなさい…

犬一 やあ、めでたいめでたい！

柊子 あなたが私をまるごと受け止めてくれる人だったなんて、ほんと嬉しい！

猿太 あ、けど、キックは一年に一度くらいで…

柊子 遠慮せずいつでもかかってらっしゃい！ああく腕がなるうゝ

犬一 (猿太に) びびらない、びびらない。柊子さんは、あなたの救世主♪

猿太 きゅ…救世主か…

柊子 ついさつきまで真つ暗に見えたこの崖っ。ぶちが、ばら色に見えて来たわ

猿太 そ、そうだね。

犬一 さ、お二人の新たな門出を祝って祝杯を上げにいきましょう。

柊子 ええ！さ、あなた、行きましよ、行きましよ。

猿太 あ、ああ…君を殺すなんて絶対に不可能だ。

音楽が流れて来て、柊子は猿太を引きずるように連れて上手に去る。犬一は、缶ビールを飲み干し、空き缶を脇に挟んで、ポケットからメモ帳を取り出す。

犬一 ふう…（メモを取り出し書き込みながら）自殺防止件数プラス一件。スカッとすつきり、これ大

事…（顔を上げて）あれ？今回は自殺とはいえない？…ま、いいや、防いだことには変わりない。（メモを覗き）もう少しで目標達成だ。（書き込みながら）親友路線が一番有効…つと。（メモを閉じる）

柊子の声 おまわりさん！行っちゃうよ！

犬一 ケンイチ！ケンイチです！ケンイチって呼んでえ！

犬一、脇に挟んでいた空き缶を落として、上手に走り去る。入れ替わりに、下手奥から鶴造がヨタヨタと出てくる。

鶴造

ここで、この崖っぷちで何か…何かあった…何があったんだ？

上手から亀子が、怒りながら走り込んで来る。

亀子

こらーっ！また缶を捨てた奴はどこ誰じゃーっ！わての大切な場所を汚すなーっ！（空き缶を拾い、鶴造を見て）あんたかい、こいつを捨てたのは！

鶴造

（亀子をじーっと見る）

亀子

若いものの手本になるべき年寄りが、こんな真似するとは、世も末だわ。自分で出したゴミは自分で持ち帰る、わかった？ちよっと聞いてんの、あんた！

鶴造

（亀子をじーっと見て）あなた…もしかして、どこかで会ったことありませんか？

亀子

はあ？

鶴造

どこかで…どこかで会ったことが…

亀子

はあーっ？

鶴造

だから、どこかで会ったこと、ありませんかって！

亀子

それ、あらでのナンパ？

鶴造

は？

亀子

やだねえ、この色ボケじじいっ！いい年して、いくらアタシが色っぽいからってそんなダサイナンパを仕掛けてるとは、はーん！いい度胸してんね、あんた！

鶴造

ナンパって何？

亀子

とぼけんじじゃないよ、このスケベじじいっ！

鶴造 す、すけべ？

亀子 さっさと去りやがれ！

鶴造 いや、僕はただ、君とどこかで会ったんじゃないかと…

亀子 まだそんな寝ぼけたことを！（缶を投げつけ）うりゃーっ！消えな！わての大切なこの崖っぷち

で、それ以上、汚らわしい言葉を吐きやがったら、ここから突き落とすよ！

鶴造 ひえーっ！

亀子 その缶、持ってけ！この色ボケじじいっ！

鶴造 （缶を拾いながら）じゃ、また…

亀子 まただあ？二度と顔出さな！

鶴造、素直に缶を拾ってヨタヨタと上手に去る。

亀子 なんなんだ、あの爺さん…やけに素直じゃん…ちっ！気色悪いつたら！

亀子、下手奥にスタスタと去る。

### 第三話 女三人 崖っぷちバトル

波の音。夕暮れ時に変化する。丑恵が大きなクーラーバックを肩からぶら下げて出てくる。

丑恵 うわーっ！きれいな夕日！見て見て！寅姉さん！寅、寅、寅姉さん！

寅美が上手から走ってきて、丑恵の頭をガツンとこずく。

丑恵 イッター！

寅美 その呼び方、やめなさいって言ってるでしょ！

丑恵 ごめんなさい！つい、テンションあがっちゃって！（海を指差し）ホラ！

寅美 まあ、きれい！…勝負には持って来いのシチュエーションだわ！

そこへ、上手から巳来がやって来る。

巳来 なんて素敵な…燃えるような夕日、キラキラ輝く海原…美しいわ！

丑恵 巳来さんて詩的表現がお上手！

巳来 あら、やだ！恥ずかしい！

寅美 （丑恵をつつき小声で）なぜ、この女におべっか使うのよ。

丑恵 （大きな声で）本当に上手だなあって。

寅美 大きい声出すな！（再び小声で）私に口答え？いい度胸じゃない、丑恵。

丑恵 （小声で）そ、そんなつもりは…

巳来 ああーっ！生き返った気がする。ありがとう、寅美さん。

寅美 何が？

巳来 ここに誘ってくれて。こんなところ、一人じゃなかなか来れないもの。

寅美 あら、そう？私はよく来るのよ、ここ。

丑恵 ほんとですか？

寅美 (丑恵をこづき) 一人で考えごとしたときとか…ね。

巳来 そうなんですか！

丑恵 ここ自殺の名所なんですよ。

巳来 え？そうなの？

丑恵 はい。何でも一年で五十体くらい死体があがるとか。

巳来 へえ…(崖の下を覗き込み) うわっ！す、凄い！これじゃ落ちたら一貫の終わりね。

寅美 昔は、もっと大勢の人がここから飛び降りたらしいわ。

巳来 昔って…いつ頃？

寅美 戦時中。

巳来 へえ…

寅美 このあたりが大空襲に襲われ、火から逃れるために、ここから飛び込んで大勢の人が亡くなったんだって。

丑恵 さすが、寅美さん！博学う！

巳来 悲しい崖っぷち…

寅美 この崖っぷちがああ世とこの世の境目。

巳来 ここは彼岸に渡れる崖っぷちなね。

丑恵 なに？それ。

巳来 此岸から彼岸に渡る川のことを三途の川って言うじゃない。あ、そうか、だからか。

丑恵 何が？

巳来 来る道すがら高く積み上げられた石の山があっちにもこっちにもあったでしょ？

丑恵 あったあった！

巳来 欲や煩惱にまみれた此岸から、欲や煩惱が開放された彼岸に渡るために、みんなああやって石を積むの。

丑恵 へえ…姉さん、煩惱って何？

寅美 あんたがいつも思ってることよ。

丑恵 へ？

寅美 お金が欲しい！美味しいもん食べたい！ブランドもの身につけたいっ！男が欲しいっ！

丑恵 ああ、寅美姉さんが思ってることか。

寅美 私は男なんていらぬわよ！

巳来・丑恵 え？

寅美 (巳来に) あなた、案外、物知りね。

巳来 そうですか？これくらい常識だと…

寅美 世の中、常識知らずがゴマンといるわ。その中じゃ物知りの方よ。

巳来 まあ珍しい…寅美さんが私を誉めて下さるなんて。

寅美 どういう意味？

巳来 嬉しいわ、とつても。

寅美 ふん！ちよつと丑恵！喉かわいたんだけど！

丑恵 あ、ごめんなさい、気づかなくて！

寅美 だからあんたは、いつまでたつてもヘルプから這い上がれないのよ。

丑恵 ごもつとも。(寅美に缶ビールを渡しながら) はい。巳来さんもどうぞ。

巳来 あ、ありがとう。

丑恵 私も飲もうつと！(缶を開けて) ささ、かんばーい！(ゴクツと飲み) うまいっ！

寅美 こら！女の子でしょ！言葉遣いに気をつけなさい。

丑恵 えへ、えへへ…

巳来 空気がいいから、お酒も美味しく感じるわ。

丑恵 ほんと！

巳来 それで？

寅美・丑恵 え？

巳来 私に話があるんでしょ、寅美さん。

寅美と丑恵、顔を見合わず。

巳来 もうすぐ夕日が沈むわ。さっさと話して下さいな。

寅美 そうあせりなさんな。

巳来 暗くなったら、(幽霊の真似をして) 出そうだし。

丑恵 えーっ！

巳来 大勢の人が亡くなってるのよ、出てもおかしくないわ。

丑恵 やだ、やだやだやだ！さっさと話をつけちやいましょ、姉さん！

巳来 話をつける？

巳来と丑恵、じーっと寅美を見つめる。

寅美 ねえ、巳来さん。最近あのこまっしやくれたボーイ、生意気だと思わない？

巳来 こまっしやくれたボーイ？ああ、あのちよっといかすボーイちゃんね。

寅美 ああいうタイプが好み？

巳来 嫌いじゃないわ。

寅美 あいつ、私に対して急に態度が変わったのよ。

巳来 あら、気付かなかった！

丑恵 変わった変わった。

寅美 なぜかしら？

巳来 さあ…

寅美 あなたに対しても変わったわよね？

巳来 そうかしら。

寅美 とぼけるの？

巳来 とぼける？何のために？

寅美 明らかにあのボーイ、あんたにはペコペコニコニコ、私に対してはつつけんどんになったわ。

丑恵  
なったなった。

巳来  
そんなこと…

寅美・丑恵  
ある！

巳来  
気のせいよ。

寅美  
あなた、私のお客取ったでしょ！

巳来  
取った？

寅美  
とぼけないでよ！

巳来  
取ってなんかいないわ。

丑恵  
取ったというか、お客さまが乗り換えたというか…

寅美  
丑恵！

丑恵  
ご、ごめんなさい…

巳来  
それはお客様の意思でしょ？私が取ったわけじゃないわ。

寅美  
むむ…

巳来  
そんな遠回しな言い方はやめて、はっきり言って下さらない？

寅美  
じゃあ、はっきり言うわ！

巳来  
どうぞ。

寅美  
あんた私の座、狙ってるでしょ！

巳来  
え？

寅美・丑恵  
No.1よ！

巳来  
アハハ…私がNo.1を狙ってる？アハハ…

寅美

とぼけんな！

丑恵

姉さん、言葉遣いが…

寅美

うるさーい！

巳来

あり得ないですよ。寅美さんは、女らしくて色っぽくて頭も良くて気が効いて、男の人たちにいつも囲まれて…私の憧れなんです。その寅美さんを追い落とすような真似、私がすると思います？

寅美

よくもまあ、そんな体中痒くなるような台詞を吐けるわね、あなた！

巳来

本当よ！私は女の中の女になりたい…寅美さんのように。

丑恵

(虫眼鏡で巳来の顔を見て) 本当？

巳来

(虫眼鏡を覗き返し) 本当よ！

丑恵

どうやら本当のようです。

寅美

何、馬鹿やってんの！

丑恵

これ嘘発見器なんですのよ、オホホホ…

寅美

どこが？

丑恵

目の奥の色が見えるの、ウッフ…

寅美

気持ち悪い笑い方、やめてよ。

丑恵

はい。

巳来

わかってくれました？

寅美

理由は何であれ、あんたが私の座を脅かしてるのは事実よ。

巳来

そんなつもりは全くありません！

寅美

つもりがあるうがなかるうが…

丑恵

明らかに人気があるのは巳来さん。

寅美

(丑恵に) あんたどっちの味方なの。

丑恵

どっちって…寅美姉さん。

寅美

それでよし。

巳来

で、何が仰りたいのかしら？

寅美

うちの店やめてくれない？

巳来

え？

寅美

やめてよ。

巳来

でも…

寅美

やめろーっ！

巳来

…私が邪魔だってわけね。

寅美

そういうこと。

巳来

いやです。

寅美

いや？

巳来

やめません。

寅美

へえ…

巳来

なんですか？

寅美

いいのかしら、そんなこと言って。

巳来

何がですか？

寅美 私知ってるのよ、あなたの、ヒ・ミ・ツ！

巳来 秘密？

寅美 ばらしちゃっていいのかなあ？

巳来 なんですか、秘密って。

一人隅っこで、お酒をぐびぐび飲みだす丑恵。

寅美 言っ方がいいのかしら？

巳来 脅して店から追い出そうって魂胆ね。

寅美 脅しなんて下品なことするかしら、オホホホ…

丑恵 するんだな、これが。

寅美 ウフフ：何ならここから突き落としてあげましょうか？

巳来 私を殺す気？

寅美 話によっては。

巳来 人殺しをしてまでNo.1にしがみつきたいの！

寅美 お黙りっ！

丑恵 姉さんにとっとうちの店は、生きる全てなの。

巳来 私にとってもかけがえのない場所よ。

丑恵 (虫眼鏡で巳来をじろじろ見て) 苦しげな顔も美しい。

巳来 (虫眼鏡をバツと取り上げ丑恵を睨んで) ありがと。

丑恵 怒った顔もグー！

寅美 よく化けたわね、あなた。

巳来 ……化けた？

寅美 女より女に見える。

巳来 どういう意味？

寅美 男でしょ。

巳来 は？

寅美 本当は、男。

巳来 誰が？

寅美 あなた。

巳来 私が男？

寅美 知ってるのよ。

丑恵 私も知ってる。

巳来 アハハハ…バカバカしい、どこにそんな証拠が…

丑恵 ちゃん、話しておあげ。

一週間ほど前に私が巳来さんの隣の隣のテーブルに入ったときにお客さんから聞いた話。

「ねえ、あのテーブルの子って何て言うの？」「巳来ちゃん」「びっくりしたなあ！いやね、アレをバサッとぶった切ったってのは風の噂で聞いてたんだ」

巳来 嘘よ、そんな話。

丑恵 嘘じゃない！同級生だって言ってたよ。

巳来 …同級生？…名前は？

丑恵 卯沙山太郎。

巳来 え！タ、タロちゃんが…

寅美・丑恵 タロちゃん？

巳来 タロちゃんがお店に来た…

丑恵 来たよ。

巳来 そう、タロちゃんが…

丑恵 タロちゃんが「その辺の子よりきれいなんで、マジびっくりだ」ってさ。

巳来 きれい？きれいって言ったの？

丑恵 言ったよ。

巳来 ホントね？

丑恵 （虫眼鏡を自分にあて）ホントです。

巳来 きれいって、タロちゃんが言ってくれたんだ…嬉しい！

寅美 何、喜んでるの？

巳来 昔の同級生が女として認めてくれたのよ、これが喜ばずにいられますか！

寅美 あなた、男だったってばれて平気なの？

巳来 平気じゃないわ…けど、密かに憧れてたタロちゃんがきれいって…グフフ…

寅美 じゃ、あなた、性同一何とかって奴だったの？

巳来 ええ、ずっと女の子にならなかったの。男の子に恋しても気持ち悪がられるだけでしょ。好きな人に告白も出来ず、かわいい洋服もかわいい髪形もきれいなお化粧も出来ないのよ。うらやましか

つた、女の子たちが。

へえ…

由来 ようやくお金がたまつて、去年、性転換手術を受けたの。

丑恵 そうだったの…

由来 いいわよ、ばらしても。

寅美 え？

由来 バレルの覚悟してたから。

寅美 店をやめれば言わないわよ。

由来 やめない。

寅美 やめれば言わないって言ってるの！わかんないの？

由来 だから言ってもいいって言ってるでしょ！

丑恵 どうしてそこまでうちの店にこだわるの？

由来 やつと見つけた居場所だもん。仲間だもん…生まれて初めて女として私を扱ってくれた仲間よ。

わかる？この気持ち…失いたくないの…だから…

寅美 失うわよ、あんたが元は男だったって知ったら、みんなあんたから去っていくわ。

由来 そんなことないっ！そんなこと…

丑恵 私は関係ないよ、由来さんが元男であろうとなかろうと。

寅美 丑恵！あんた、いったいどういう…

由来 男であろうが女であろうが、由来さんは由来さんだって言ってるの。

寅美 あんた、私を裏切る気？

裏切る？

そうよ、あんたは私の子分でしょ！

子分？

子分は出過ぎた真似するな！

プハハハ：

な、なぜ笑うの：

親分子分の契りを交わしたことなんかあったっけ？

そ、それは：でも、あんたいつつも私を助けてくれて：

私みたいな女がこの世界で生きていくためには、No.1のコバンザメにでもなるしかない。わかるでしょ、それくらい。

：で、私から巳来に乗り換えるってわけ？

もう寅美さんの時代は終わった。

何ですって！もう一度言っごらん！

何度でも言っあげるよ、この世界じゃ寅美さんは、もう御払い箱。

丑恵ーっ！こ、殺してやる！

寅美、丑恵に掴みかかる。

やめて！やめてよ、二人とも！

寅美さんの秘密！知ってるのよ、わ・た・し。

寅美 (ビクツとして) あんた私を脅す気?

丑恵 寅美さんも、元、お・と・こ、男ーっ! よね?

寅美 な、何を…何をバカなこと言ってるの! 冗談にも程があるわ!

丑恵 見ちゃったのよ、私。

寅美 な、何を?

丑恵 二年前くらいだったかな…寅美さんがベロンベロンに酔っ払って、家まで送ってったとき…薬、

薬、って叫ぶもんで、戸棚の中を探したの、そしたら、免許証があつてね、顔写真は姉さんだっ

たけど、名前が…

やめてーっ!

とらお。

とらお?

性別、男。

お、おとこ?!

やめてやめてやめてやめて、やめてーっ!

あなたも男。

そうなの。

ち、違う…

男だったの。

違う違う違う!

私にとってはどうでもいいことよ。

丑恵

寅美

巳来

寅美

丑恵

巳来

寅美

巳来

丑恵

巳来

丑恵

寅美

寅美

…

丑恵

男であろうが女であろうが、寅美さんは寅美さん。

巳来

そうかあ、寅美さんも私と同じ悩みを抱えてたのね。

寅美

私はあんたと違うんだ！

巳来

大丈夫よ、誰にも言わないから。

寅美

お黙りなさい、だまらっしゃい！私はあんたとは違うって言ってるでしょ。

巳来

どう違うって言うの？

寅美

オレは、女になりたくてなつたんじゃないんだ！

巳来・丑恵

え？

寅美

騙されたんだよ、借金取りに。

巳来・丑恵

えーっ？

寅美

騙されて、ぶった切られたんだよ、大事なものを…うう…

巳来

嘘…

寅美

嘘じゃない！自分の意思じゃなく女の体にされ、その体売って金を返した！わかるか？この屈

辱が…

巳来

昔は借金返済のために男の子が女の子に性転換させられたって聞いたことはあったけど…本当だつたんだ…

寅美

あんたたちからすれば昔の話、でも私にとっては…だから放せないの、No.1の座を！私が生きてきた証なのよ、No.1は。本気で男を愛せない私にとって生きる場所はお店しかない…No.1じゃなくなったら、もう死ぬしかないの…うう…

巳来 寅美さん…

丑恵 かわいいそう…

寅美 やめて！憐れまないで！

巳来 じゃ、死ねば？

寅美・丑恵 え？

巳来 死んじやいなさいよ。

寅美 あんたって人は…

巳来 私たちがいるのはホステスの世界よ。

寅美 わかってるわよ…

巳来 OLより寿命が短いつて言うのはわかってるはずよね。

寅美 わかってるわよ！けどね！

巳来 けどもクソもないわ。姉さんの時代は終わった…かわいいそうだけど、これが現実。

寅美 だから死ね？

巳来 死にたかったら死ねばいいつて言ってるだけ。

寅美 邪魔な私が消えてせいせいするでしょうね、あんた。

巳来 邪魔？アハハハ…邪魔でも何でもないわ。だってお客様はみんな私に首ったけ、そうよね、丑恵

さん？

丑恵 そのとおり！

寅美 うう…

巳来 …で？死ぬの？死なないの？どっち？

寅美

死ぬわよ、死ねばいいんでしょ！

巳来

人のせいにしないでよね。私は死にたければ死ねばいいと言っただけよ。

丑恵

(崖っぷちに佇み) 飛び降りたらイチコロだね、姉さん！

巳来

じゃ、さようなら。お店は私に任せて安心して彼岸に旅立ってね。

寅美

……

巳来

さ、丑恵さん、行きましょう。

巳来と丑恵、そそくさと上手に去る。

寅美

(崖下をじーっと見つめ) だめだ…ダメダメダメーっ！足がすくんじゃって動かないっ！丑恵—っ！丑恵ちゃん！待って…待ってよ…一人にしないでよ、丑恵…

寅美、崖っぷちで力なく崩れる。丑恵、そーっと出てきて、寅美の背中を叩く。遅れて巳来もやって来る。

寅美

だれ…

丑恵

丑恵。

寅美

戻って来てくれたのね。

丑恵

いえ、飛び降りる手助けをしてあげようかと…

寅美

ひ、ひどいっ！

丑恵 うっそおっ！

寅美 丑恵ーっ！

巳来 丑恵さんはね、ずーっと寅美さんのこと見続けて来たの。いいところも悪いところもみんな知ってる大切な仲間…そうよね、丑恵さん。

丑恵 うん。だから、私はずっと寅美さんのそばにいるよ。

寅美 え？

丑恵 ただしっ！お店では巳来さん派になるから、そこんとこよろしく。

寅美 ど、どういうこと？

巳来 お店とか関係なくずっとあなたのそばにいるって言ってるのよ。

寅美 意味がわからない…

丑恵 私、寅美さんが好き。

寅美 え？

巳来 やっぱりね。

寅美 何なの？それ…

丑恵 同性愛になるのかなあ、この場合。でも、寅美さんの心は男なんだし…

寅美 どういうこと？

丑恵 もうどうだっていいじゃない！男であろうが女であろうが、お互いに大切だって思えることが一番大事なんじゃない？

寅美 丑恵…

巳来 あの、お取り込み中のところすみませんが…

寅美・丑恵 な、何？

丑恵 もう少しで抱きしめてもらえるとこだったのにい。

寅美 ば、ばか言うな！

丑恵 へへっ！

巳来 私はお店をやめませんから。

寅美 もういいわ。あんたの好きしな。

巳来 そして、近い将来あなたの座を譲り受けます。私はそういう女…女、女、女！ああ、いい響きっ！

丑恵 あなたについて行きます！

寅美 このコバンザメ！

丑恵 妬かない妬かない。

寅美 妬くか！私だって、まだまだ負けないから。

巳来・丑恵 強がつてるう。

寅美 どんなに落ちぶれても、私には（丑恵を見て）大切な人がいる…

丑恵 なは…じゃ、先、行ってまーす！（クーラーボックスを担いで走り去る）

巳来 そばにいとわかららないのよね、大切な人って…

寅美 …そうね…

巳来 あ、一番星！

寅美 きれい…空の色が…

巳来 青から藍色に…私、忘れないわ、今日のこと…

寅美 うん…

音楽が流れ出す。上手から鶴造がヨタヨタと出てくる。

鶴造　きれいなお姉さんだなあ。

巳来・寅美　え？ダレ？あなた。

鶴造　わからない、わからないんだ。

寅美　ボケ老人？

巳来　シート！認知症って言うのよ。

鶴造　私はなぜここにいるんだ？

巳来・寅美　さあ…

寅美　ね、どうする？このままほっておいてさ、身投げでもされたらまずいんじゃない？

巳来　いいんじゃない、別に。

寅美　巳来！

巳来　だってかわいそうよ、こんな状態で生きてるなんて。そう思わない？

寅美　思わないよ、明日は我が身かもしれないじゃない。

鶴造　この辺に亀さんはいるかね？

巳来　亀さんはいませんよ、多分。

寅美　いるとしても、この崖の下、かな？

鶴造　（崖の下を覗き込み）いませんねえ…あ、ああああ！

巳来・寅美　危ない！

崖つぶちに危うく落ちそうになった鶴造を巳来と寅美が助ける。

巳来 お爺ちゃん。

鶴造 お爺ちゃん？

巳来 お爺ちゃん、でしょ？

鶴造 私はお爺ちゃんじゃない！鶴造だ！

巳来 わ、わかったわ、鶴造さん、さ、一緒に崖つぶちから降りましょう。

寅美 下までご一緒にしますわ。

鶴造 いやだ：いやだいやだいやだ！おまえたち、私をどこに連れてく気だーっ！

巳来 な、何なの、この爺ちゃん。

鶴造 私はここから離れないぞ！離れない！離れるもんか！

鶴造は、灯籠にしがみつく。目が点になる寅美と巳来。

巳来 私たちも、いずれ年取るんですよね。

寅美 そ、そうね。ああはなりたくないなあ：

巳来 どんなお婆ちゃんになるんだろ、私たち。

寅美 考えたくない！

寅美、上手に去る。巳来、地平線と夕日を見つめる。

巳来

愛する人と一緒に歳を取れたらいいな・・・そうだ、タロちゃん…タロちゃんに連絡取ってみよう・・・

巳来、上手に去る。灯籠にしがみついたままの鶴造。そこへ灯籠に火を入れに亀子がやって来る。

亀子

だ、誰だ！

鶴造

ぜったい離れない、ここから離れないぞおーっ！

亀子

あ！色ボケ爺さん！

鶴造

あ、君は！

亀子

まだこんなところでうろうろと！さっさと消えなっ言っただろ！

鶴造

亀！

亀子

え？

鶴造

亀がこのあたりにいるはずなんだよ！

亀子

ボケてるんか、あんた。さ、どいたどいた！

鶴造

亀が…

亀子

私の大事な灯籠にさわるな！

鶴造

大事な灯籠？

亀子

あんたには関係ないっ！

亀子、怒りながら、灯籠に火を灯す。灯籠をじーっと見つめる鶴造。

亀子  
消えなって言ってるだろ！

鶴造  
この灯籠、気になる…

亀子  
もうっ！つたくボケ老人は困ったもんだ！

亀子はスタスタ去る。暗転。

鶴造  
気になる…この灯籠…なぜだ？…

鶴造、灯籠の周りをぐるぐる回っている。音楽が高まり、暗転。

## 第四話 崖っぶちの青りんご

季節は秋。午後三時頃。静かな波の音が聞こえる。上手から辰人と馬子がじゃんけんして「ちよこれーと、ばいなっふる、グリコのおまけつき」をやりながら、三途の崖にやって来る。

馬子  
グリコのおまけつき、っと。(海を見て) うわーっ！すごーいっ！

辰人の声　　おーい！馬子ーっ！じゃんけんはあ？

馬子　　あ、ごめん！馬子は、只今現地に到着しましたっ！この勝負、馬子の勝ちーっ！

辰人の声　　また負けたのかーっ！

馬子　　辰人さん！早く上がって来て！すっごいよ、この景色！

辰人の声　　わかったーっ！

馬子は恐る恐る崖つぷちに近寄る。

馬子　　（唾を飲み込み）ここから…ここから飛び降りるんだ…（武者ぶるいをして）ああ！ダメダメ、恐がったら辰人さんに嫌われる。（もう一度、崖下を覗き込み）こんな凄惨な崖、初めて見た…

そこへ、上手から辰人が走って来るが、立ち止まり馬子をじーっと見つめる。

辰人　　恐い？

馬子　　うわっ！

辰人　　驚き過ぎだっ。よっぽど恐いんだね。

馬子　　そ、そんなことないよ！ね、ね、見て、すっごくきれい！太陽の光でピカピカしてる。

辰人　　（遠くを眺め）ホントだ。

馬子　　（時計を見て）あと九時間ね。

辰人　　（時計を見て）うん…お？おやつの時間だ！

馬子 待つてました！この時間が楽しみだったの。

馬子はリュックを下ろして中からおやつと飲み物を取り出す。

辰人 さつき、ランチの時もおんなじこと言ったよ、君。

馬子 だって…辰人さんと食べるランチもおやつもディナーも今日が最後でしょ、だから…

辰人 そっか…

馬子 (グリコのビスコを差し) はいっ！辰人さんの大好きな赤ビスコ。

辰人 サンキュ。これ僕の好物。

馬子 栄養あるんだよね、これ。

辰人 うん。おいしくって強くなる、すくすく元気、赤ビスコ。おなかにやさしい乳酸菌が一億個入ってま

す。さらにカルシウム、ビタミンB1、ビタミンB2、ビタミンDもたっぷり。

馬子 お子さまのすこやかな成長のために。

辰人・馬子 ビスコをどうぞ！

辰人と馬子、二人で顔を見合わせて大笑い。

馬子 ……幸せ。

辰人 うん…

馬子 ……なんか信じられないなあーっ！

辰人 何が？

馬子 昨日からずーっと辰人さんと一緒なんだよね？

辰人 そうだよ。

馬子 まるで夢の中にいる気分。

辰人 そっか：

馬子 今までこんなにゆっくり一緒にいたことないもん。

辰人 厳しいからね、うちの門限。もし破ったら大変なことになる。

馬子 辰人！お仕置きよ！さ、お尻を出しなさい！

辰人 やだよー痛いよー！やめてーっ！

馬子 え？ほ、ほんとに叩かれるの？

辰人 許してーママーっ！

馬子 ママって呼ぶんだ：

辰人 呼ばないよ。うちは手を上げたりもしない。

馬子 あーびつくりした！

辰人 仕掛けといて急にマジになるなよ、ノリだよ、いつものノリ。

馬子 ごめん：

辰人 うちはさ、門限破ると自由時間が減らされるんだ。そうすると、馬子と会う時間も減る、だから  
：

馬子 知ってる。知ってるけど、もっと一緒にいたいって思うようになって：

辰人 だからここに来た。

馬子  
うん…

辰人  
馬子…後悔してるんじゃないのか？

馬子  
後悔？何を？

辰人  
ボクの誘いに乗ったこと、後悔してるだろ。

馬子  
し、してないよ！私は辰人さんがいなきゃ生きてけない。辰人とだったらどこへだって行ける。

辰人  
ほんとに？

馬子  
ほんとよ！疑うなんてひどいよ。

辰人  
…ごめん…

ベンチに腰掛ける二人。波の音が静かに鳴り響いてる。少しの間。

辰人  
寒い？

馬子  
少し…

辰人  
…うろこ雲だ。

馬子  
もう秋か…

辰人  
青い空に白い雲、一億五千万キロ離れた太陽から降り注ぐ光に照らされてキラキラ輝く大海原…

馬子  
地球って美しい。

辰人  
(立ち上がり) この美しい地球もいずれ滅亡するんだよな。

馬子  
…悲しいね。

辰人  
悲しくなんかないさ。僕たち人間がこの手で破壊するんだ、悲しがらなんて間違ってる。

馬子 馬子は何にもしてないよ。

辰人 みんなそう思ってる。自分は何にも悪いことなんかしちゃいないって。けど、そうか？本当にそうか？

馬子 原発をつくったのは大人でしょ、排気ガスが出る車に乗るのも大人、一晚中ネオンをチカチカさせるのも大人。

辰人 家でエアコン入れるだろ？

馬子 う、うん・・・

辰人 蛇口をひねれば水が出るし、スイッチポンで電気が流れる、僕も馬子も使いたい放題。地球の資源は限られてるのにな。

馬子 そだね。

辰人 けど、それだけじゃない。山を削り、木をバンバン切り倒し、植林しても間引かないからやせ細った木ばかり育っちゃって、大人は役に立たないバカなことばかりしてる。そのつけは、全部僕たちに回ってくるんだ。

馬子 都合の悪いことは見て見ぬふりして、「あとは任せた、未来をつくるのは君たちだ！」

辰人 ふざけるなーっ！

馬子 ふざけるなーっ！

辰人 (崖っぷちまで走って行って) 大人のバカ野郎ーっ！

馬子 (同じく崖っぷちまで走って行って) バカ野郎ーっ！

辰人 ぼくたちの未来を返せーっ！

馬子 返せーっ！

辰人 ぼくたちの未来を…未来を…

馬子 辰人さん？

辰人 未来なんかないんだ…僕たちに未来なんてないんだよ…

馬子 …あるよ。

辰人 …え？

馬子 この崖の名前、知ってるよね？

辰人 三途の崖…だろ？

馬子 うん。此岸（しがん）と彼岸（ひがん）を結ぶ崖なんだって、ここ。

辰人 知ってるよ。でも、此岸とか彼岸とかって非科学的で僕は信じられない。

馬子 そうね…あっちの世界は死んだ人しか見られないもんね…でも、私はあるって信じてる。

辰人 へえ…

馬子 此岸は今私たちが生きている世界、彼岸は亡くなった人が住む世界。この崖は彼岸につながってる…

辰人 君がそんなことを考えてたなんて知らなかった。

馬子 うふふ…ほんとには詳しくなんかないの。けど、この三途の崖に二人で行こうって決めた日から興味を持ち始めて…

辰人 なんだ、にわか勉強か。

馬子 いいじゃない、にわか勉強だってしないよりマシ、でしょ？

辰人 まあね。

馬子 この崖の向うにね、辰人さんと馬子の未来があるの。

辰人  
ふーん：

馬子  
だから私は怖くない。この崖っぷちの向うに光り輝く未来があるんだもの、何も恐がることなんかはない。

辰人  
キミは強いね。

馬子  
そんなことないよ。強いのは辰人さんじゃない。いつも馬子を励ましてくれて、助けてくれて、たくさんのこと教えてくれて：

辰人  
いや：助けてもらってるのはこっちだよ。

馬子  
え？

辰人  
僕は父さんのような歯科医になるためだけの受験生活から逃げたかった。広い世界に飛び出さなかったんだ。馬子と付き合わなかったら、レールの上を歩くだけのつまらない人生だったかもしれない。馬子に助けられたんだ、僕は。

馬子  
照れるなあ。

大きなカゴを背負った亀子が、ゴミ拾いをしながらやって来るが、二人に気づき、陰に隠れる。

辰人  
：けど：

馬子  
けど？

辰人  
レールを外れて生きてきたところで、こんな国、こんな世界、何の未来もないって思うようになって

：

馬子 絶望の虜になった。

辰人 そう、絶望の虜、まさに崖つぶち、僕たちは崖つぶちの…  
馬子 恋人たち。

辰人 なんか恥ずかしいな、ソレ。

馬子 そう？じゃあ…

辰人 ウエルテルだ…若きウエルテルだよ、僕たちは…

馬子 崖つぶちのウエルテル？

辰人 うん…ウエルテルは悩み苦しみそして、自殺した。

馬子 そうなんだ…さすが辰人さん、何でも知ってるのね。

辰人 そんなことないよ。君のほう知ってることだって…

馬子 …ありがと。

く 間 く

馬子 懐かしいなあ。

辰人 何が？

馬子 図書館。

辰人 図書館？

馬子 辰人さん、いつも同じ時間に同じ場所で勉強してたよね。

辰人 家が息苦しかったからね…図書館は居心地が良かった。

馬子 誰も干渉しないもんね。

辰人 それだけじゃない。みんなそれぞれ別のことをしてるのに同じ空間にいる…あの不思議な空気が好きだった。

馬子 私は、辰人さんが本を読んだり勉強している姿を眺めるのが好きだった。

辰人 僕は君の視線になかなか気づかなかったけどね。

馬子 真剣なあなたの顔を見てるだけで幸せだったの。

辰人 照れるな。

馬子 照れるでしょ。

辰人 からかったな！

馬子 アハハ…その照れた顔も好き。

辰人 馬子！

馬子 アハハハ…

辰人 僕はそういう馬子の天真爛漫さがうらやましかった。

馬子 あら、過去形？

辰人 いや…現在進行形。

馬子 良かった♪

辰人 けど…もうすぐ過去完了形…

馬子 もうっ！今は楽しいこと考えようよ。

辰人 …今頃、母さんたち大騒ぎだろうな。

馬子 辰人さん！

辰人 キミは気にならないの？

馬子 気にしてどうするの？心中やめて家に戻る？

辰人 いや、そういうことじゃない。

馬子 じゃ、どういうこと？

辰人 あたふたしている姿を思い浮かべるとき、おかしくておかしくて。

馬子 え？

辰人 だってそうだろ？さんざん僕のこと縛り付けた親たちがオロオロしてるんだぜ。こんな楽しいこととはないよ。

馬子 本気で言ってるの？

辰人 本気さ。

馬子 私は…私は…（涙が込み上げてくる）

辰人 やっぱり帰りたいんだね。

馬子 違う！違うの！

辰人 母さんや父さんと別れるのが辛いんだろ？悲しんだろ？

馬子 そうじゃない！そうじゃないけど…

辰人 じゃ、なぜ泣くの？

馬子 わからない…わからないけど、涙が勝手にこぼれて…

辰人 泣きたきゃ泣けばいい…今だけだもんな、熱い涙を流せるのも。

馬子 （辰人の胸に顔をうずめ）うう…

辰人 …日が沈んでいく…最後の夕日が…

亀子、スタスタとベンチ下のゴミを拾いにやって来る。

亀子 青りんごちゃんたち、ちよいと、ごめんね。

辰人・馬子 うわっ！

亀子 (空き缶を拾いラベルを見て) 未成年は飲酒禁止！

辰人・馬子 え？ (缶を見て)

辰人 ぼくたちじゃありません！

亀子 (二人の匂いをかいで) つまらん。

辰人・馬子 え？

亀子 ったくマナー違反が多くて困るわい。

辰人・馬子 はあ…

亀子 あんたら、どっから来たん？

辰人 (来た方向を指差し) あっち。

亀子 飛び降りかい？

辰人・馬子 えっ？

亀子 こっから飛び降りるんだろ？

辰人 ち、違いますよ。

亀子 ウェルテルに嘘は似合わんぞよ。

馬子 お婆ちゃん！盗み聞きしてたの？

亀子 人聞きの悪い！

馬子 だってウエルテルって今…

亀子 あんなデカイ声で（二人の真似をしながら）「若きウエルテルだよ、僕たちは…崖っぷちのウエルテル？」って聞こえたら、思わず立ち止まるがな。

馬子 じゃ、それからずっとここに？

亀子 （辰人の真似をして）今だけだもんな、熱い涙を流せるのも。

馬子 恥ずかしーっ！

辰人 お、お婆ちゃん、見逃して下さい！お願いします！ほら、馬子も！

馬子 え？あ、うん。

辰人・馬子 お願いします！

亀子 あたしや止めないよ。飛び降りたきや飛び降りればいい。

辰人・馬子 え？

亀子 青りんごにだって自分の道を選ぶ権利はあるさ。

辰人 …ありがと、お婆ちゃん。

亀子 お、そうそう、知ってるかい？ここから飛び降りた死体がどうなるか。

辰人 いえ、知りません。

馬子 ど、どうなるの？

亀子 知らんのかい。知らんなら知らんほうがいいわい、それじゃ。

馬子 待って！（亀子を引き留める）

亀子 （馬子の手を振り払おうとしながら）わては忙しいんだよ。

馬子 聞かせて、どんな風になるの？

亀子 何が？

馬子 とぼけないで！

辰人 馬子！失礼だぞ。

馬子 ご、ごめんなさい…

辰人 飛び降りた死体、どうなるんですか？

亀子 知りたい？

馬子・辰人 知りたい。教えてください！

亀子 やめとくよ。

馬子・辰人 なぜですか？

亀子 あんたらの決意が揺らぐとまずいだろ？

馬子・辰人 揺らぎません。

亀子 (リアクションで) ほんとかなあ？

馬子・辰人 揺らがない！絶対に！

亀子 そーお？

馬子・辰人 は、はい…

亀子 じゃあ、教えてやるか。

亀子、ビスコを見つける。

亀子 お？懐かしい！赤ビスコ！

馬子・辰人 おばあちゃん！

亀子 これ貰ってもいい？

馬子 ど、どうぞ。

亀子 (バクバク食べて) うまいうまいっ！(むせて) ゴホッ！ゴホッ！(パンフレットを故意的に落とす)

辰人 馬子！飲み物！

馬子 はいっ！(ジュースの缶を開けて亀子に渡す)

亀子 (ゴクゴク飲んで) はあ…死ぬかと思った…

辰人 で、どうなるんですか、死体。

亀子 ここは自殺の名所だな、年間五十体ぐらいの死体上がるんよ。

辰人 知ってます。

馬子 (落ちていたパンフレットを見つけて) これ、何？

亀子 こちらのパンフレット！

馬子 パンフレット？(広げて中を見る)

亀子 ったく、ろくでもない観光客が多くてたまらんわ！(またビスコを食べ出す)

辰人 (パンフレットを覗きこむ)

馬子 …ね、この崖の下に六文なしの洞窟があるんだって。

亀子 そうそう。

馬子 六文なし…六文って…

辰人 六文…もしかして六文銭の六文？

亀子 青りんご、よう知ってるねえ。

馬子 あ、それ、三途の川を渡るのに必要なお金だ。

亀子 こっちの青りんごも！こりや、たまげたわい。

馬子 えへ。けど、六文なし…ってことは…

辰人 ここに書いてある！洞窟に打ち上げられた死体は向こうの岸に渡れなかった死体、だって。

馬子 えっ？

亀子 青りんご（二人を手招きしてベンチに座らせて）想像してみ。

辰人・馬子 何を？

亀子 死体。

馬子・辰人 …

亀子 岩にぶつかりながら落ちた死体は骨が砕けて、水を飲んだ身体はパンパンに膨れ上がる。

辰人 骨が砕けて…

馬子 パンパンに…

亀子 形があればまだマシ。

馬子 どういう意味？

辰人 （パンフレットを見て）白骨化した死体が多いって書いてある。

亀子 魚が肉を喰らうんよ。

馬子 魚って人間を食べるの？

亀子 目玉を真っ先に食べるらしいぞよ。

辰人・馬子 目玉を？

亀子 パクつとな。

辰人・馬子 ヒエーッ！

亀子 青リンゴちゃんも目玉を食われるのか？

馬子 い、いやだ…目玉を食べられるなんて、いやーっ！

亀子 覚悟しとき。あんたらもあっちの岸に渡れず目玉を食われた白骨死体になるってことをな。

馬子 い、いやよ！

辰人 ぼ、ぼくたちは、あっちの岸に渡れるから大丈夫だよ。

亀子 もし、あっちの岸に渡れなかったら？

辰人 そ、それは…

亀子 (帰ろうとする) わてにや、関係ないこつた。さてと…

辰人 お婆ちゃん！言い逃げですか？

亀子 こらっ！青りんご！

馬子・辰人 は、はいっ！

亀子 聞いたのはあんたらだ、違うか？

馬子・辰人 そ、そうです。

亀子 それを言い逃げだとお？

辰人 す、すみません…

亀子 青りんご！

辰人 は、はいっ！

亀子　もう一度、しっかり話し合いな。飛び降りるのはいつだって出来るさ。

辰人と馬子、顔を見合わせる。亀子、去りかけて立ち止まる。

亀子　あ、一つだけ言わせておくれ。

馬子・辰人　はい。

亀子　本当に大切だと思うなら、離れ離れになっちゃいかんよ、何があってもな。

馬子・辰人　は、はい。

亀子　（遠い記憶を思い出しながら）昔なあ…ここで崖落ちの約束した恋人同士がいたんよ。

辰人・馬子　崖落ち？

亀子　けど、空襲で離れ離れになっちゃまってねえ…女はずっと男を待ち続けたんだけど、二度と会えずじまいさ。

馬子　悲しいお話…

亀子　（涙ぐみながら）だから離れ離れになっちゃいかん！絶対にいかんのじゃ……わかったかい？

馬子・辰人　は、はいっ！

亀子　んじゃ、さいなら。

亀子、上手にスタスタと去る。

馬子　待ち続けてる女って…

辰人　　もしかして…

辰人・馬子　お婆ちゃん…

辰人と馬子、沈黙。波の音。

馬子　　（突如）辰人さん！

辰人　　な、何だよ、急に大きな声出して。

馬子　　私ね、どうしても言えなかったことがあるの。

辰人　　言えなかったこと？

馬子　　うん…嫌われるのが恐くて言えなかった。

辰人　　…

馬子　　私は辰人さんと同じ道を歩めるならどんな道だっていい。ただね…

辰人　　ただ？

馬子　　もう少し、勝手な大人たちが支配するこっちの世界で、一緒に悪あがきしたいなあって…

辰人　　悪あがき？

馬子　　心中はいつだって出来る、お婆ちゃんも言ってたでしょ。

辰人　　…

馬子　　私たち、本当は現実から逃げたくて、大人のせいにしてるんじゃないかって…

辰人　　そんなことは！

馬子　　ない？

辰人 ……

馬子 辰人さんは違うのかもしれないけど、私は…

辰人 いや……僕もそうかもしれないな…

馬子 (辰人の手を取って) ね、もう一度考えてみようよ。

辰人 けど…

馬子 考えて悪あがきしてそれでも心中したいって思ったら、またここへ来ればいい。

辰人 ……

馬子 三途の崖はどこにもいかないもん。

辰人 どこにもいかない…か…

馬子 そうよ。(ビスコを手に取り) はい、あーんして。

辰人 なんだよ、急に。

馬子 ビスコを食べてるときの辰人の顔、好きだから、ね、食べて、お願い。

辰人 やめろよ、今、そんな気分じゃ…

馬子 (無理やり口に入れる)

辰人 お、おいっ！ぐふっ！

馬子 こうすれば食べざるを得ないでしょ？はい、ジュース。

辰人 もうっ！強引だぞ、馬子！

馬子 親や、大人に対して、強引に挑んでみない？

辰人 え？

馬子 何にもしないで諦めるより何かしてから諦めるほうが良くない？

辰人 …馬子…君は、いつからそんなに強くなった？

馬子 辰人といふからよ。辰人といれば強くなれる。

辰人 凄いな、君は…

馬子 愛が人を強くするんだって。

辰人 愛が？

馬子 なんちゃって！

辰人 馬子…

亀子が上手から出て来る。鶴造は陰で三人のやり取りを見ている。

亀子 うおっ、かゆかゆ！かゆいわーたまらんわー

辰人・馬子 (慌てて離れる)

亀子 いつまでイチャついとるんだい。

馬子 (真っ赤になり) イチャイチャなんか…

亀子 ここは夜になると出るんだよ、これが。

馬子・辰人 お、おばけ？

亀子 うらめしや〜

馬子 キヤーツ！（辰人に抱きつく）

亀子 ったくのろいねえ！亀みたいだよ、あんたたち！

鶴造が思わず上半身を乗り出す。ビスコに気付いた亀子がビスコをじーっと見つめる。

辰人 (ビスコを亀子に差し出し) これあげるよ。

亀子 ふん！(そっぽを向く)

馬子 知らないの？

亀子 (横目でビスコをじーっと見て) やっぱ、ちようだい。

馬子・辰人 アハハ：

亀子 あんがと。

辰人 こっちこそ。

辰人・馬子 ありがとう、おばあちゃん。

亀子 さ、行った行った、青りんごちゃん！

辰人 行こう。

馬子 うん！

辰人と馬子、上手に走り去る。

## 第五話 崖つぶちの記憶

波の音。

亀子

やれやれ…

亀子、ベンチに座り夕日を見つめる。おもむろに立ち上がり上手に去りかけた時、鶴造が下手奥から飛び出て来る。徐々に月明かりになっていく。

鶴造

どんガメ！

亀子

(ドキッとして固まる)

鶴造

どんガメ、そう、どんガメだ！

亀子

まさか…(振り返り)なんだ、色ボケ爺さんか。

鶴造

どんガメ！君はどんガメだ！

亀子

ったく、失礼な爺さんだね！二度と顔出さなつて言つただろ！

鶴造

どんガメ、オレだよ。

亀子

はあ？私はボケた爺さんに構つてる時間は…

鶴造

鶴造だよ。

亀子

は？

鶴造

鶴造！

亀子

(鶴造をじっと見て)嘘…

鶴造

嘘じゃない！

亀子

あ、あんたが鶴造さん？嘘だ、嘘嘘嘘ーっ！デタラメ言うな！

鶴造

(亀子を振り向かせ)これを見ろ！

亀子  
へ？

鶴造  
（ほくろを指差し）ホラ。

亀子  
（ほくろをじーっと見て、ほくろを指で押す）ぼち…

鶴造  
ぐおーっ！（奇妙な顔を作る）

亀子  
ウヒャーッ！（飛び退く）

鶴造  
な、なんだ？

亀子  
からかうな！私は忙しいんだよ！（帰ろうとする）

鶴造  
卵焼き！

亀子  
（立ち止まり）は？

鶴造  
卵焼きが食べたい。

亀子  
な、何言ってるの？

鶴造  
甘くない卵焼き。

亀子  
アホか…：卵焼きは甘いほうがおいしいんだ！

鶴造  
甘い卵焼きなんて卵焼きじゃない！

亀子  
甘い卵焼きが一番だ！

鶴造  
甘くない卵焼きだ。

亀子  
甘い卵焼きだつて！

鶴造  
やっぱり亀だ！

亀子  
亀？なんなんだよ、あんた。

鶴造  
君は、星空を眺めるのが好きだったよな。

亀子  
え？

鶴造  
オレも好きだった。よくこの崖に来て海の音を聞きながら一緒に星空を眺めただろ。

亀子  
……

鶴造  
覚えてないのか？

亀子  
人違いだよ！

鶴造  
君が好きなのは、甘い卵焼きにお赤飯、貝殻、小石、青い空に浮かぶ白い雲、夕焼け、夜空、そ

れから……オレ。

亀子  
あんた占い師か？

鶴造  
は？

亀子  
それとも詐欺師かい。

鶴造  
さ、詐欺師？

亀子  
こんな婆ちゃんから何を取ろうってんだ？お金もなければ家もない。あるのは、この身一つ。え？

あんた老婆マニアか？この私を持って遊ぼうって魂胆か！

鶴造  
ば、バカ言うな！そんな趣味はない！

亀子  
だったら、なぜ私の好きなもん知ってたんだよ！

鶴造  
だからオレは……そうだ！確かここに……（灯籠の裏側を掘り出す）

亀子  
な、なにするんだ！やめてっ！（突き飛ばす）

鶴造  
いつてえ……何するんだよ！忘れたのか？ここに埋めただろ、アレを。

亀子  
え……

鶴造  
アレだよ。

亀子  
ア、アレって何さ！

鶴造  
手紙だよ。

亀子  
……

鶴造  
五十年後のオレたちに宛てた手紙。

亀子  
あ、あなた……

鶴造  
二人で埋めただろ、ここに。

鶴造、再び掘り出す。

亀子  
な……なぜそれを……

鶴造  
五十年前のあの日、五十年後、一緒にこの手紙を掘り出そうって……

亀子  
五十年前のいつ？

鶴造  
七夕の日。

亀子  
え？

鶴造  
忘れたのか……

亀子  
……あなた……本当に、つ、鶴さん？

鶴造  
鶴さんだって、さっきから言ってるだろ。

亀子  
こりや夢か？

鶴造  
夢じゃない、俺は鶴造！

亀子、腰を抜かす。鶴造は再び掘ろうするが、へたり切ってその場に座り込む。

鶴造 情けない…こんなことすら出来ないなんて…

亀子 ……あんた……どっか悪いの？

鶴造 体力がないんだ…ずっと寝たつきりだったもんで…

亀子 寝たつきり？

鶴造 そう、五十年間寝たつきり。

亀子 え……！

鶴造 昏睡状態だったらしい。

亀子 ご、五十年間も？

鶴造 ああ…

亀子 う、嘘だ、そんなこと信じられるわけないだろ！

鶴造 一番信じられなかったのは、オレだ！

亀子 どこに、どこにいたのさ、五十年間も。

鶴造 寺で世話になってた。

亀子 寺？

鶴造 孤児のオレが世話になってた和尚さん、覚えてるか？

亀子 和尚さん……あの、和尚さん？

鶴造 あの和尚さんの弟子がずっとオレの面倒をみてくれてたんだって。ごく奇特な人がいるもんだ。

亀子 ……本当なんだね？

鶴造 言っただろ、一番信じられないのはオレだって。

亀子 ……

鶴造 目覚めて最初に鏡を見た時の衝撃、わかるか？

亀子 ……

鶴造 髪は白髪、顔はしわだらけ。私はダレ？

鶴造、再び疲れ切ってその場に座り込む。

鶴造 ふう…そうか…みんな忘れちゃったのか…五十年間のこと…

亀子 忘れるもんか！

鶴造 え？

亀子 忘れるわけないだろ。

鶴造 ホントか？

亀子 忘れようとしたさ。けど忘れられなかった！

鶴造 ……忘れようとした…

亀子 当たり前だろ！あんたはあの日こなかった。

鶴造 あの日？

亀子 崖落ちを約束した日だよ。

鶴造 崖落ち…

亀子 この三途の崖で崖落ちの約束をしたじゃないか！忘れたのかい？

鶴造 覚えてるよ。

亀子 けど、あんたは約束を破った。

鶴造 え？

亀子 あの日、あんたは来なかった。

鶴造 ちよ、ちよっと待ってくれ！

亀子 何だよ。

鶴造 崖落ちの約束は覚えている。けど、その後の記憶がないんだ。

亀子 あのさ、言い訳にしてもひどすぎやしない？

鶴造 ほんとなんだ。あの日を境に何一つ思い出せない。昏睡状態になったわけも…

亀子 だからさ、もちっとマシな言い訳を…

鶴造 言い訳なんかじゃない！本当に五十年間、寝たきりだったんだよ！

亀子 ……

鶴造 医者からは言われたよ、五十年前の空襲で負傷しその後ずっと昏睡状態だったって…けどな、

ちっとも思い出せないんだ。頭に浮かんでくるのは三途の崖…だからここに来れば何か思い

出せるかもしれないと思って…

亀子 それで、ここに…

鶴造 君と会って、約束をしたところまでは思い出した。けど…オレは約束を破ったのか？

亀子 破った…んだと思ってた。

鶴造 思ってた？

亀子 あの日、空襲があつて…

鶴造 空襲…頼む、その日のこと、話してくれないか？

亀子 本当に覚えてないの？

鶴造 ああ…頼む、この通りだ。

亀子 ……

鶴造 あ、出来れば約束したところから話してくれないか？

亀子 なんで？

鶴造 記憶を確かめたいんだ。

亀子 わかったよ…五十年前の…あれは夕暮れ時だった…

音楽が流れ出し、照明が変化して五十年前の回想シーンになる。

亀子 え？嘘…

鶴造 本当だ、召集令状が来た。

亀子 …で、いつここを？

鶴造 明日。

亀子 明日？急すぎるよ！

鶴造 ごめん…言えなかったんだ…

亀子 ひどいっ！ひどいよ、鶴さん！

鶴造 オレ…ずっと考えてた。

亀子 何を？何を考えてたって言うの！

鶴造 戦場には何のために行く？

亀子 え？

鶴造 人を殺しに行くんだ。オレに人は殺せない。

亀子 誰だつてそうだよ。けど、みんなお国のために、家族を守るために、戦地へ…

鶴造 殺さなければ殺される。オレは海の向こうで死ぬことになる。

亀子 いや！

鶴造 君と離れ離れで死ぬんだぞ！

亀子 鶴さんが死んだら私も生きていけない。

鶴造 オレは兵士にはならない。

亀子 …え？

鶴造 入隊しないことに決めたんだ。

亀子 そ、そんなこと…無理よ。見つかったら殺される。

鶴造 殺されてたまるか…

亀子 鶴さん…あっちの岸に渡れば、誰も追いかけてこないよね。

鶴造 え？

亀子 崖落ちしようよ、鶴さん！

急に音楽止まり、照明が元に戻る。

鶴造 ちよつと待った！

亀子 何よ、今ちようどいいところだったのに！

鶴造 君の記憶、間違ってる。

亀子 どこが？

鶴造 崖落ちを誘ったのはオレだ。

亀子 違うよ！誘ったのは私。

鶴造 オレだって！

亀子 私だよ！

鶴造 オレだ！

亀子 私！

鶴造 絶対にオレ！

亀子 絶対に私！

鶴造 オレはこう言ったはずだ。

再び音楽が流れ、回想シーンの照明になる。

鶴造 オレは兵士にはならない。

亀子 …え？

鶴造 入隊しないことに決めた！

亀子 そ、そんなこと…無理よ。見つかったら処刑される。

鶴造 処刑されてたまるか！

鶴さん…

カメ、二人で崖落ちしよう。

崖落ち？

三途の崖からあっちの岸に渡るんだ。六文銭があれば必ず渡れる。

…死ぬってこと？

違う、あっちの岸で一緒に生きるんだよ。

…

このまま二度と会えなくなってもいいのか？

いやだ…やだよ、私だって鶴さんとずっと一緒に…

明日の午前零時に三途の崖で待ってる。

一人で来いってこと？

二人だと人目につくだろ。

真夜中だよ、一人じゃ怖いよ…

人に見られたら一貫の終わりだ。

だって…

ぐずでのろまだもんなあ、おまえ。じゃ、諦めるか…

再び急に音楽止まり、照明が元に戻る。

亀子

違う！違う違う違う！

鶴造 違わないよ。

亀子 それじゃ、私って単に情けない女じゃん！

鶴造 ぐずでのろまでオレに頼ってるおまえはかわいかったぞお。

亀子 私はもっとしっかりしてたって。

鶴造 してないしてない！

亀子 してた、絶対してた！

鶴造 いいから続き、続き。

亀子 絶対、違うからね、その記憶。

鶴造 いいから聞けって。

亀子 もうっ！

再び音楽が流れ、回想シーンの照明になる。

鶴造 ぐずでのろまだもんなあ、おまえ。じゃ、諦めるか…

亀子 ……頑張るよ、頑張って一人で崖に行く。どんガメとはさよならする。

鶴造 ……よし！じゃ、明日の午前零時に三途の崖で。

亀子 わかった……必ず来てね。

鶴造 君こそ、必ず来いよ！じゃな、どんガメ！

亀子 もうっ！どんガメとはさよならするんだからーっ！

音楽が止まり、照明が元に戻る。

亀子 違うって！私、どんガメなんかじゃ：

鶴造 自分でどんガメって言ってたぞ。

亀子 え、う、うん…けど！

鶴造 オレの記憶のほうが確かだよ。五十年前で全部止まってるんだから。

亀子 …うう悔しいけど否定しきれない：

鶴造 君と別れたのが夕日が沈む頃だったね。

亀子 私は走って帰った。午前零時まであと六時間しかなかったから。

鶴造 ちょっと待て。

亀子 今度はなに？

鶴造 六時間って、今言った？

亀子 言った。

鶴造 六時間ってことはないだろう。

亀子 だって、鶴さんと別れたのが午後6時頃でしょ、だから午前零時までには…

鶴造 オレは明日の午前零時って言ったはずだ。

亀子 そうだよ。

鶴造 だったら二十四時間足さなきゃ。

亀子 なんで？

鶴造 明日だぞ、今日じゃなく明日。

亀子 だって、午前零時は明日の暦…

鶴造 え？

亀子 え？

鶴造・亀子 えーっ?!

亀子 もしかして…

鶴造 もしかして…

亀子 約束の日を

鶴造・亀子 間違えた？

鶴造・亀子 えーっ?!

亀子 そんな…

鶴造 あーっ！オレがバカだった！そうだよな、確かに暦の上では午前零時は明日…

亀子 だよね…間違えたのはあんただ。

鶴造 すまない！この通りだ、許してくれ！

亀子 いいよ、もう…五十年も前の話さ。

鶴造 ……でね、その後の記憶を思い出そうとすると、頭が割れそうに痛くなって、どうしても思い出せないんだ…

亀子 多分ね…ハンパじゃない世界を見ちゃったからだよ。

鶴造 ハンパじゃない世界？

亀子 この世のものとは思えない地獄を…あんたは見たんだ、きつと。

鶴造 地獄？

亀子 聞きたい？

鶴造 …聞きたい。

亀子 あんたの心臓、破裂しちまうかもしれんよ。

鶴造 いいよ。

亀子 やだよ。

鶴造 いいって言うてるだろ。

亀子 やだって言うてるだろ。

鶴造 何もないんだ。

亀子 え？

鶴造 何もないんだ、今のオレには！だからせめて、君との約束を守れなかったわけを知りたいんだ！

頼む…

亀子 …あんたのここ（心臓に手をあて）が止まっちゃったら、私もどうなるかわからん。

鶴造 ……

亀子 まあいいや、あんたと会うためにここに棲みついた結果がそれなら…

鶴造 お、オレと会うために棲みついた？

亀子 そうだよ、悪い？

鶴造 いや…じゃ、君はずっとここでオレを？

亀子 いいじゃないか！そんなことはどうでも…

鶴造 ……

亀子 じゃ、覚悟はいいね？

鶴造 お、おう。

亀子 あの日、走って帰った私は、いつもと同じように夕飯を食べてお風呂に入って寝床にもぐりこんだんだ。

柱時計が十時を知らせる音。照明が変化し、音楽が重なって聞こえて来る。

亀子 時計の音が午後十時を告げた。私は。家族に気づかれないように、そーっと家から抜け出し、三途の崖に向かった。

鶴造 オレはその頃…次の日の旅立ちに向けて、両親に手紙を書いていた。なんて書いていいか筆が進まず、気づくと午後十一時を回って…

亀子 私、遅刻はつかしてたから、旅立ちの日ぐらい遅刻しないぞって思って、早めにうちを出たんだ。それだってぎりぎりじゃないか。

亀子 一人つきりで待つのが怖いもん。

鶴造 ま、まあ…

亀子 あんたは来てるはずだって思ったのに、あんたはいなかった。

鶴造 ……恐かったか。

亀子 恐かった…恐くて泣きそうだった…

鶴造 すまん…

亀子 けど我慢したよ、どんガメとはさよならするんだって自分に言い聞かせて…

鶴造 そうか…

亀子 その時だよ、空襲警報が鳴り出したのは。

鶴造 空襲警報？

亀子 そう！…それからアツと言う間だった。

鶴造 何が？

亀子 敵の軍機が数え切れないほどたくさん飛んで来たんだ。物凄い音だった。もう怖くて足がすくんで…その場に伏せることで精一杯だった…

鶴造 ……

亀子 暫くして顔を上げると…

鶴造 ……上げて？

亀子 町が…町が…真っ赤に燃えて…火の海だった。

鶴造 火の海…火の海？火の海…火の海…火、火、火…うう…（苦しみ出す）

亀子 鶴さん！鶴さんはどこ？鶴さん！鶴さん！鶴さん、早く来てーっ！

鶴造 亀…

亀子 いくら呼んでもあなたの声はしなかった。聞こえてくるのは飛行機の音と町が燃える音…鶴さん！鶴さん！鶴さん…！（涙で声が詰まる）

鶴造 （呼吸が荒い）オレは見た…見たぞ、燃える町を…見た…見たんだ…

亀子 思い出したんだね…

鶴造 真っ赤に燃える炎の先は…君のうちの方角！オレは走った、君の家に向かって…オレは狂いそうだった、亀にもしものことがあつたらつて…

亀子 私を助けるために…

鶴造 思い出した！

亀子 え？

鶴造 そうか…オレは下敷きになったんだ！

亀子 下敷き？

鶴造 焼けた家が崩れ、敷きになっちまったんだ…少しして誰かがオレを助け出してくれた。そして、再びカメの家に向かって歩き出し…

音楽が止まり、照明が元に戻る。

鶴造 その後は記憶が…ない…

亀子 ずっと…ずっと待ってたんだ…けど、あんたはどうとう来なかった。

鶴造 ……ごめん……

亀子 家族はみんな焼け死んだよ。

鶴造 おれが…約束を間違えたから、君は助かったのか…

亀子 助かりたくなかった。いつその時死ねたらどんなに幸せだったか…

鶴造 亀…

亀子 あんたのことも探したんだよ！あんたが世話になった寺も行った、けど、真つ黒焦げになっちまって…まさか鶴さんもこの中に…黒焦げの寺の前で呆然と立ち尽くしていた時、和尚さんを見つけたんだ。和尚さんに「鶴さんはどこ？」って聞いたけど和尚さんは「いないんだ…いなくなっちゃった…」って…ここにいないってことは、鶴さんは生きている！きつとどこかで生

鶴造

きている！そう思ったわては、一心不乱にあんたを探したけど…見つからなかった…  
そうだったのか…

亀子

死にたかった…死にたかったよ、本気で死ぬことを考えたよ！

鶴造

すまん…あの時、時間さえ間違えなければ…一緒に死んでいたなら君にそんな辛い思いをさせずに済んだのに…

亀子

けど、そうしたらあの子に会えなかった。

鶴造

あの子？

亀子

赤ん坊だよ…

鶴造

赤ん坊？

亀子

あんたとわての子ども。

鶴造

こ、こども？！

亀子

あの時死んでたら、あの子にも会えなかった。ううん…あの子の命まで奪うっちゃうとこだった

…

鶴造

オレの…子？

亀子

もう少しであんたの子を殺しちゃうとこだったよ…ここから飛び降りなくて良かった、ホントに良かった…

鶴造

オレに子どもがいる…いるんだな。

亀子

(頷く)

鶴造

…

亀子

女手一つで育て上げるのは容易じゃなかった。時には危ない橋も渡らなきゃならなかった…あん

たには話せないことだつて：

鶴造 話してくれ！ぜーんぶ話してくれ！

亀子 話したくないこともあるんだよ！

鶴造 ……

亀子 あの子にはね…小さい頃、父さんはあっちの岸に行つたつて教えてたんよ。

鶴造 あっちの岸…

亀子 でねえ、どうしようか迷つたけど、あの子が成人式を迎えた日、本当のことを話したんだ、空襲であんたと離れ離れになった時のことを。

鶴造 あの子のことを…で、その子は…なんて？

亀子 戦争が憎い、つて…

鶴造 憎い…

亀子 父さんと母さんを離れ離れにし、父さんの顔も知らない私のような子をたくさん生み出した戦争が憎いって。

鶴造 ……

亀子 あ、そうそう、ここに埋めた手紙のことも話したんだ。

亀子、灯籠の後ろに行つて掘り出す。

亀子 確か亀に入れて埋めたんだよね。

鶴造 で、その子はなんて…

亀子

うらやましいって言われたよ、そんなに思える人がいた母さんがうらやましいって。こっぴड़ाしくなって、もうそれっきりあんたのことを話すのはやめたけどね。

鶴造

そうか…

亀子

(空を見上げ) 鶴美にどれだけ救われたか…

鶴造

鶴美？鶴美って言うのか？

亀子

そう。

鶴造

鶴って…もしかしてオレの…

亀子

あんなの名前から取ったんじゃない！鶴亀の鶴、私が亀で娘が鶴、おめでたいだろ？不幸とさよならしたかった、だから鶴って…

鶴造

鶴造の鶴もその鶴だ…

亀子

うるさいね！

鶴造

オレは…オレは…何もしてやれず…君にも辛い思いをさせて…

鶴造

…

亀子

あんなのおかげだよ。

鶴造

カメ…

亀子

あんなのおかげで、どんガメとはさよならできた。

鶴造

…

亀子

けど…がらっぱちになっただろ。

鶴造

…

亀子

こうじゃなきゃ、生きて来れなかったんだ。

鶴造　オレは…何も知らずノホホンと寝てたわけだ。子どもまで作っておきながら、布団の上でただノ

ホホンと…夢だけを見ながら五十年間も…すまない…

亀子　謝るな！

鶴造　だって謝るしか…

亀子　謝るなって言ってるだろ！

鶴造　…

亀子　コレ、やるよ。(ビスコを投げる)

鶴造　(驚きつつもビスコを受け取って) なんだい、コレ。

亀子　赤ビスコ。うまいんだよく食べてみ。

鶴造　食べ物？(口に入れて) う、うまいっ！

亀子　でしょ？…謝ったからって五十年が戻って来るわけじゃない。

鶴造　こんなうまいもん、五十年前はなかった…

亀子　今は、おいしいもんが、そこら中にある。

鶴造　オレは浦島太郎だな…

亀子　むつかしいむつかしい浦島はく　たすけたかつめに連れられてえく

鶴造　目が覚めたら全てが変わっちまって！見る事聞く事知らないことだらけ…

亀子　竜宮城へ来てみればく　どうだった？竜宮城は。

鶴造　三途の崖…三途の崖の夢ばかり見てた…(辺りを見渡し)　ここは変わってない…この三途の崖だ

亀子　けは、昔と変わってない…

亀子　(土の中の亀を見つけ) あった！

鶴造 あった？あったか！五十年前の手紙が…五十年間埋めたときのままそこに…

亀子 あ…だめだ、こりや。

鶴造 え？だめって…（亀を見に行く）あ…

亀子 亀が割れて、泥水が入って、ぐちゃぐちゃだ…

鶴造 …君は、何て書いた？

亀子 覚えてない。

鶴造 オレは覚えてる。

亀子 えーっ？

鶴造 五十年後の亀子へ。君がこの手紙を開く頃、オレは死んでるかもしれない。もし生きていたら、

きつと毎日楽しく暮らしているんだろうね。子どもが生まれ、その子どもが結婚し、孫が生まれ

て…

亀子 孫はいないよ。

鶴造 …死ぬまで君と一緒に楽しく…

亀子 うわっ！かゆいかゆいつ！

鶴造 確かにかゆい…

亀子 青かったねえ、私たち。さっきの青りんごとおんなじだ。

鶴造 カメ！

亀子 な、何？急に。

鶴造 もう一度、オレと…

亀子 やめな！

鶴造 言わせてくれ！もう一度、オレと…

亀子 やめなつて言ってるだろ！

鶴造 なぜだ！

亀子 見たろ、さっきの手紙。

鶴造 ……

亀子 五十年たてばあんなつまうんだ。手紙だけじゃない、人間だって同じさ。

鶴造 オレは、オレの気持ちは何も一つ変わってない！

亀子 半世紀だよ！半世紀！私は、半世紀生きてきたんだ。あんたは半世紀の記憶がない。

鶴造 ……そうだ、その通りだ…

亀子 じゃ、わかるね…私の言ってる意味…

鶴造 ……半世紀を埋めることなんて出来ない……ってことか…

音楽が変化していく。

亀子 当たり前だよ！半世紀、必死に生きてきた私と、竜宮城に行つてたあんた、この時間は埋めようがないよ。

鶴造 ……

亀子 じゃあね、もう会うこともないだろうけど。（去ろうとする）

鶴造 ここに来れば！

亀子 （立ち止まる）

鶴造 ここに来れば、また会えるか？

亀子 (振り向く) ……

鶴造 会えるか？

亀子 な、何それ。

鶴造 会えるかって聞いてるんだ。

― 間 ―

亀子 私は…いつも、ここにいるよ。

鶴造 会いに来てもいいか？

亀子 会いに来られても迷惑なんだよ！

― 間 ―

鶴造 オレはここに来る。

亀子 ……

鶴造 来る。

亀子 ……あんたがどうしようとかあんたの勝手さ。

鶴造 ああ、オレの勝手だ。

― 間 ―

亀子 私は、ただここに  
いるだけ。  
鶴造 また、来るよ……  
ここに……

音楽が高まっていき、照明が絞られていく。

〔 幕 〕